

『貞操婦女八賢誌』：解題と翻刻(四)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-05-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高木, 元 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6855

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



『貞操婦女八賢誌』——解題と翻刻——（四）

高 木 元

【キーワード】 南総里見八犬伝、為永春水、二代目為永春水、人情本、稗史ものの中本

前号に引き続き、『南総里見八犬伝』の改作である『貞操婦女八賢誌』三輯を紹介する。

本作は人情本風の三巻三冊で構成されており、読者対象を女性とした企画であったと思われる。だが、既述した通り、内容的には稗史小説と呼ぶべきもので読本の如き章回様式を採用している。しかし、この三輯だけは五巻五冊と規格外の造本になっており、この点を「四編以下を副作した二世為永春水は、読本に近付けようとして、四編を五冊とするなど、それなりの努力は試みているが、初代春水の執筆した分をふくめて、偶然によりかかった事件の連続でストーリーは展開し、『八犬伝』の雄大な構想に及ぶべくもない。合巻風の作品であり、八賢女も、九編末尾の挿絵によってそれと理解される体のものである。」（『日本古典文学大辞典』四巻、岩波書店、一九八四。執筆は神保五弥）と酷評されている。

神保氏ら大正生まれ以前世代の近世文学研究者たちにとつての戦前からの桎梏（近世小説など国文学研究の対象にはならないと云う同調圧力）が存した時代背景を充分に理解しておく必要はあるが、それでも、我々は今、その不適當な位置付けや評価は糺して措かなければなるまい。

『貞操婦女八賢誌』

稗史小説は主として半紙本読本で担われたものである。そして、一般に中本型読本は世話読本が多く、洒落本からの流れを汲み、人情本への橋渡しとして位置付けられてきた。これで大筋は説明が就くのであるが、中本型読本にも稗史小説に近いものは存在していた。すでに述べてきたことではあるが、「人情本の元祖為永春水の『武陵壁夜話』三巻三冊（文政十一年）は匡郭を取り払った人情本風の造本ではあるが、色模様のない敵討物で、会話を導入し愁嘆場を強調した作品である。同じく『小説坂東水滸傳』前後二編各三巻三冊（文政十三～十四年）は一名「千葉系譜星月録」とあり、千葉家の御家騒動を「星塚佐七、星合於仙、星井志津馬、星野正作、星川主水、星影利光、星石賢吾」の七人の活躍で解決するという構想の『八犬伝』模倣作である。[...]半紙本の史伝物を指向する作品も見られる。」（拙稿、第二章第一節「中本型読本の展開」、『江戸読本の研究』、ペリカン社、一九九五。）また、この時期の人情本にも中本型読本的な伝奇性を残した作品も多かったのである。

とりわけ、この稗史小説的な中本を担ったのが為永春水であったといっても差し支えないであろう。つまり、中本という書型が保有する自由な実験が可能であった場において、世話読本たる人情本と

は別途の稗史小説へ向けた試みがなされていたと見ることが出来るのである。

しかし、半紙本と違って、中本五巻五冊という仕立ての前例はほとんど見られず、大半は一卷一冊、一卷二冊が多く、また一卷三冊という構成も見受ける。したがって、二代目の為永春水（もしくは板元）が第三輯（のみ）を五巻五冊にしたのは「読本風にする」ということを意図したものだとはいえない。むしろ、第一輯と第四、五輯は上下二帙に分けられており、実質的には各輯六巻六冊となっている（外題と内題の編数が齟齬していることは後の「巻端附言」でも触れられている）。ならば、初代から二代へと嗣作された時に、三輯（二巻六冊）に一冊分足りない稿本五冊のままで出版を急いだものとも考え得る。

一方、改作は所詮二番煎じで、原作が築いた確乎たる評判（商品価値）の上に成立しているのであるから、容易に原作を凌駕し得るはずもないし、その固有の（文学的価値）を原作と比しても無意味である。ならば、舞台の設定変更や構想趣向の転用などにその妙を見て評価すべきで、その意味で本作は、「南総里見八犬伝」を「武蔵〔国〕豊島〔家〕八賢女」として再構成したもので、実に良く出来た改作だと、むしろ積極的に評価出来ると思うのは僻目であろうか。

それかなしか、後摺本も流布してるし、何より明治になって実に多くの活字翻刻本が出されていることから、良く読まれていたものと想像できる。

【書誌】三輯（五巻五冊）

書型 中本 十八・六×十二・五種

表紙 丁子色水色白色地に縦縞飾模様

外題 左肩「貞操婦女八賢誌」編 壹（五）（十三・三×二・七種）。

題簽の上部（花を白抜き）から柿色、下部（船を白抜き）から空色のボカシを施す。

見返 なし（白）

序 「柳北の釣夫、為永春水記」（序一オ〜序二オ）

口絵 第一〜三図 見開き三図（丁付なし）。濃淡の薄墨を施す。

内題 「貞操婦女八賢誌三輯卷之一（五）」

尾題 「貞操婦女八賢誌三輯卷之一（五）終」

編者 「東都 狂訓亭主人編次」（内題下）

畫工 記載なし

刊記 なし

諸本 館山市博・早稲田大・西尾市岩瀬文庫・山口大棲妻・東洋

大・東京女子大・三康図書館・千葉市美。

翻刻（一）参照

備考 この三輯だけが五巻五冊となっている。なお、後印本の詳細な調査報告については後日を期したいが、千葉市美蔵本の三輯五巻巻末には刊記「長次郎事 勸善堂春水撰」四郎兵衛事歌

川國直画圖／善次郎事 溪齋英泉画圖／弘化二年乙巳歳／書肆

大坂心齋橋筋博勞町 河内屋茂兵衛／同心齋橋筋南久太郎町 秋田屋市

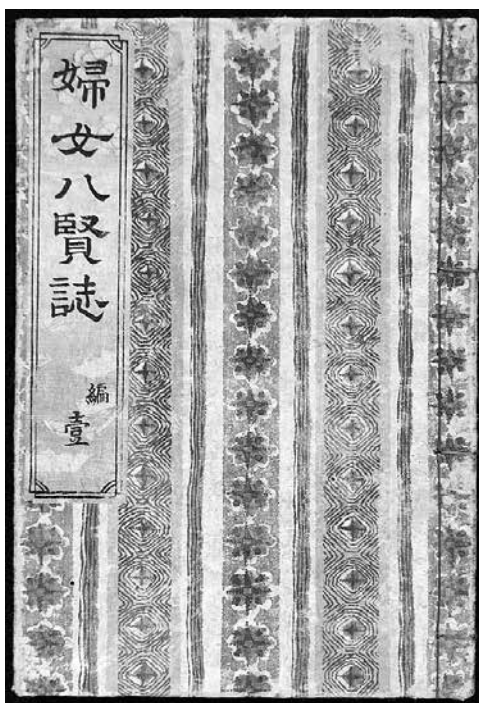
兵衛／江戸京橋弥左門町 大嶋屋傳右衛門板」が附されている。

【凡例】

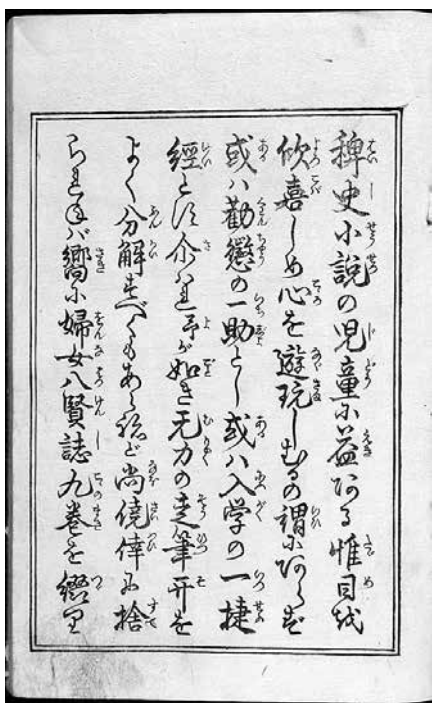
- 一 人情本刊行会本などが読みやすさを考慮して本文に大幅な改訂を加えているので、本稿では敢えて手を加えず、可能な限り底本に忠実に翻刻した。
- 一 変体仮名は平仮名に直したが、助詞に限り「ハ」と記されたものは遺した。
- 一 近世期に一般的であった異体字も生かした。
- 一 濁点、半濁点、句読点には手を加えていない。
- 一 明らかな欠字や誤記の部分は、原文の近くに「〔 〕」に入れ私意で補正を示した。
- 一 「丁移りは」で示し、各丁裏に限り「」のごとく丁付を示した。
- 一 底本は、保存状態の良い善本であると思われる館山市立博物館所蔵本に拠った。

【付記】 翻刻掲載を許可された館山市立博物館に心より感謝申し上げます。なお、本稿は「SPS 科研費」P17K02460の助成を受けたものです。

【表紙】 五冊とも同一意匠



【序】



孝貞義節を専らとていふは、女流を
 禁戒と務まるものなり。毛穎の行所意の
 如く、あつては、倭めて、早ふ止まら
 ず、右なるは、夏五稔あまり、六稔と言ふ
 這回いひ、猶其次篇を輯録てよむ
 書肆が望みの屢なれば、辞を要し言

序ノ一

語を、今將五卷を編次つ、第四
 輯と云ふものなり。唯飽食の幼稚に
 爲る解、易き哉、もて要と生れ、世間
 多識の風、君子かならず、此言爲給ひ
 世といふ

柳北の釣夫為永春水記

稗史小説の児童に益ある惟目を欣喜しめ心を遊玩しむるの謂にあ
 らず、或ハ勸懲の一助とし、或ハ入学の一捷徑とす、余はれ子が如き、无方
 の走筆开をよく分解すべくもあらねど、尚僥倖に捨られねば、嚮に
 婦女八賢誌九卷を綴り、「孝貞義節を専らにしていさ、か姦淫を禁戒
 と欲するものから毛穎の行所意の如くならで、そが儘にして、早に
 止み、つ有右而ある、夏五稔あまり、六稔と言ふ、這回にいたり、猶其次篇を
 輯録てよむ、書肆が望みの屢なれば、辞を要し言」序語も盡て、今將五卷
 を編次つ、第四輯とハなすものから、唯飽食の幼稚の爲に、解し易きを
 もて要とすれば、世間多識の風、君子かならず、此言爲給ひ、そといふ

柳北の釣夫為永春水記

【口絵第一図】
腰越の阿安
丁付なし

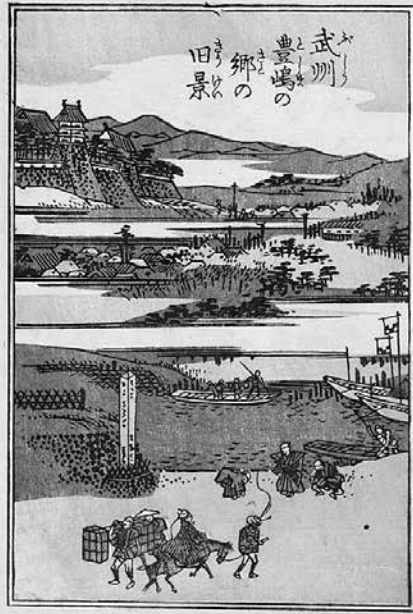


【貞操婦女八賢誌】

【口絵第二図】
勇婦於道
丁付なし
「勇婦於道」「奇婦阿多毛」
「沙木焚く煙りの末や雲のみね」



「騒がしき軒の柏や今朝の冬」
「神宮屋平左工門」
「琴塚の知縣大六」



貞操婦女八賢誌三輯卷之一

東都 狂訓亭主人編次

第十九回

船樓に二賢雌雄を争ふ
腰越に乙女乙女を救ふ

再説梅太郎ハ日外多塚にてはからずも勇婦青柳の物語
此を聆て園ノ養父の横死被くうちも遺言の錦の
袋を奪ぬ出り再度家名を興さんと思ふゆゑ又更
五
是がどのへは掛りもく空しく月日を送る程今自
錦を心張み七船樓の僅り貞職と撰まを評せ
大賢三輯の一

貞操婦女八賢誌三輯卷之一

東都 教訓亭主人編次

第十九回

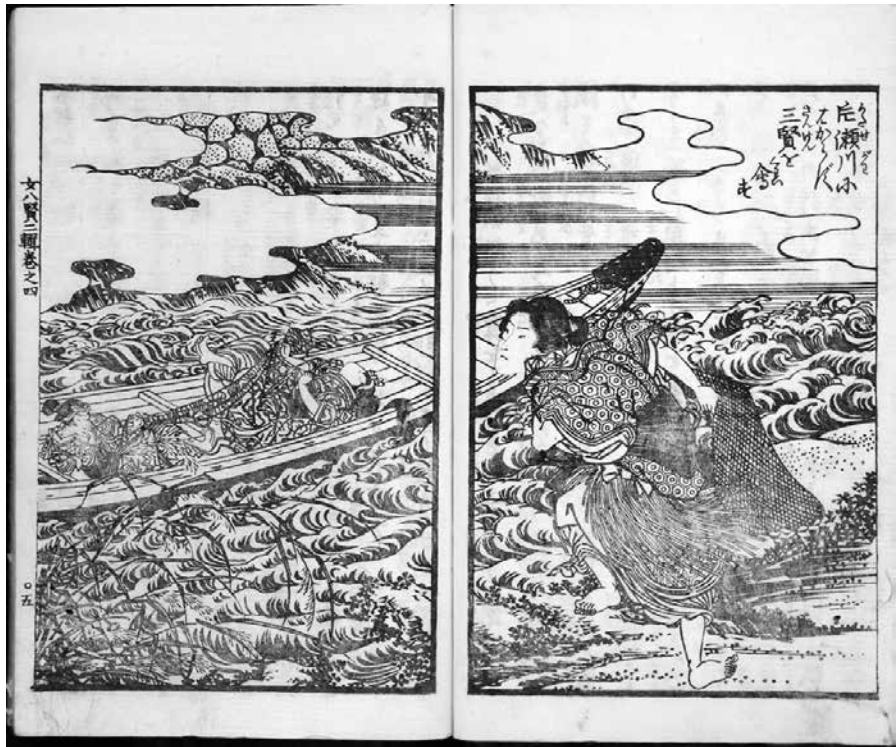
船樓に二賢雌雄を争ふ
腰越に乙女乙女を救ふ

再説梅太郎ハ日外多塚にてはからずも勇婦青柳の物語にて始めて聞
し養父の横死被くうちにも遺言の錦の御旗を尋ね出し再度家名を
興さんと思ふものから又更に是ぞといふ手掛りもなく空しく月日
を送る程に今日なん錦の旗を御戸帳にして船樓の催しあり貴賤を撰
まず拜を免すと」港の風説もつばらなれば是ぞ得難き倅ひと心強
くも只一個三重の樓に鎊りある錦の御旗を奪ひ取りさ、ゆる仕女を
数十個か或ひ八敲す投付し又取つくを蹴かへして圍みを脱れんと
働けども如何せん階子の下にハ數多の下仕の女中達手に手に得物を
引提て討て取らんとひしめくにぞ脱れ去るべき道のなれば其所に
必死をきわめたる程もあらせず八代とか名乗て樓へ登り來る捕手
の處女ハ折容たる色なく那三重の二重目まですらくと走登り樓
をきつと見あげつ、夫なる女中に物言ハ當時鎌倉に並びなき官領
さまの御内君花の方の催しある此船樓に憚りなく」登りて騒がす
のみならず錦の御旗を奪はんとハ身の程知らぬ不敵者豊嶋の殘黨
と聞かハ猶ゆるされぬ覚期して此八代が縛を敏く受よと喚はり
つ、第三重目の樓へ飛鳥のごとく駈登るをお梅ハ見つ、些とも騒
がず身繕ひして打合笑忠孝ふたつを身ひとつに思ひ込たる此梅を

假令数百の軍勢にて十重卅重に取巻とも物の数とも思はぬをいらざる女子の腕立てせずと怪我せぬ先に降伏りやと言はれて八代冷笑ひ无益の問答せんより八縛うけよと言つ、も準備の十手を振あげてヤツト聲かけ打かゝるをお梅ハ寄せじと身をひそめ透をうかゞひ砍つくる刃を潜つて八代が組んとするを組せじと互ひに争ごふ虚々実々這方八十手那方ハ」短刀一上一下と砍むすぶ双方劣らぬ働さハ最目ざましくぞ見へにける恁である事半响ばかり余ども勝負ハ見へざりしがいかにかや爲けん打合ふはづみにお梅が持たる短刀の鏢元よりして折るにぞ八代得たりと打込む十手をはづして引組むお梅が早速心得たりと八代も十手を投捨組合ふて上になりまた下になる最も危ふき折こそあれ俄に暴風吹起り荒波はげしく立程にさしも大そうに造り立し三重の樓船も何かハもつてたまるべき瞬間にくつがへり大浪の中へ打込まれて何所ともなく流されける其中にお梅八代の両勇婦ハ組合ふたるそのまゝに」くつがへる船と諸侶に高樓より轉び落ち千尋の底にしづみしと思ひの外嚮にお梅が乗來りし小船の中へ倅ひにも二個一所に落しかども斯まで荒き波風なれば須臾も其所に猶豫ず且高き樓より轉び落し変なれば兩個ひとしく息絶して艦艇をあやつるにあらざれば浪のまに／＼吹流され行衛覚めずなりにけり前話休憩爰に發説鎌倉の西にあたりて腰越といへる一村あり鎌倉より八道も僅に隔たりければ常に住む人も稀にして世に繕ひなき片鄙なり這に一箇の賢女ありて名をバお安と

喚れ」けるが双親ハ世を早く去りて孤となりしを里人の爲に育られ成長にしたがひて容顏の美麗なる卞氏が玉をもあぎむくべく姿形のやさしき事春にあへる楊柳のごとし今年僅に十七なれども其才ハ老女も及ばず且力あくまで強く武藝の道にも賢けれども常にハ殊に柔和にして仮にも仁と争はねバ村中ハ言ふもさらなり近郷までも聞傳へて譽ざる者もなかりしかバ或ひハ姫に貰ひたし聿になりたしなぞ言ひ入る、あれバ又ハ好色の若郎等ハ是が爲に胸を焦し言ひ寄る者も多かりしかども如何なる事にや此お」安ハ只能程に断りて聿をも求めず他にも嫁せず况浮たる変なぞハ聊見かへる事もなく其身ハ片瀬川へ網を入れ漁するを行業として細き煙りを立つ、も世を最易く送りけるが這日ハ殊に空晴て波風ともに靜なるに心におもふよしもあれバ早朝より船を乗出し片瀬川を上流下流と網を入れつ、あさりまはれど小隼すこしを得たるのみにて余ばかりの獵もあらねどされバとて又他を求めず一個小船の中に在て身の行末を思ひめぐらし默然として居る折しも俄に沖の方に當りて暴風はげしく吹起り最凄まじく見ゆる」【挿絵第一回】」にぞお安ハ船を芦間に漕入れ須臾風間を待つ、も空打ながめて居たりける斯る折しも川下より忽然として一ツの小船浪に引れてたゞよひ來つおなじ声間へ流れ入るにぞ於安ハ見つ、怪しみながら近寄るまゝ、によく／＼見れば年の頃十七八かいまだ井才にいたらざる容貌やさしき二個の處女何れも身輕き衣装なるが組合たる仮船底に仆れて息ハ絶てあ

【挿絵第一図】片瀬川にはからず三賢を會す



りお安はいよ／＼駭きつゝ、も思ひ合する夏あれバ、賊を逆手に取り直
 し那船縁へ打かけて這方の船に引付け、おなじ所に繋ぎ止め、扱那船
 に乗り移りて二個の體をさぐり、見るに聊呼吸の通ひあるにぞ準備
 の葉を口にくくめ、先其一個を呼び生る夏十聲ばかりに及びしとき
 アツと言ひつゝ、息吹かへし四辺を鳥驚き見まはして忙然たる事半响
 ばかり須臾言語もあらざりしをお安ハ見つゝ、打含笑如何お心付
 ましたかお怪我ハなきかと介抱ハ件のお女ハ不審氣に何処のお方
 か知らねどもついに見馴ぬ吾女が情ハ嬉しきやうなれど若やお前
 も敵方のと疑ふ言語をおしとゞめ吾倍ハ爰より程遠からぬ腰越村
 に成長網引の業に世を渡る安と呼ぶ、賤しい者最前俄の大暴に波
 を凌ぎに此芦間へ船をかける」と程もなく風随來りしひとつの
 小船中にハお前と是なるお女中組合ひながら氣絶の様子不審なが
 らも捨おかれねバお前を先へ呼び生て様子を聞た其うゑにて此お
 女中をも介抱し及ばずながらお二個のお心の和らぐやう爲やうと
 思ふて此仕合せ別に子細ハござんせねバ吾倍にお心置ハない隠ま
 しからぬ夏ならバ具に様子を語り給へと赤心面に踞はれしお安
 が言語をつく／＼聞て處女ハ心安堵たれども猶疑ひハ晴れがたく
 言んと為つゝ、猶豫をお安ハ推して打點頭お前の疑念ハ然事ながら岸
 をはなれし此船なれば他に洩聞者もなし品に」⁶よりてハ這方か
 らもお話いたす子細もあれバ假令はゞかる事ありとも枉て打明け
 語りてよと再度問はれて那處女ハ須臾思接の跡なりしが四辺を見

まはし言語を密め心ありげなお前の言語斯念頃(ごころ)に問ひ給ふを言はずハ恩義を弁へぬ仇(あだ)し女子と思はれん世に隠ましき変ながら吾侪(わがし)ハ豊嶋の家臣何某(なにがし)が處女なれども實父の上ハ先置て産にも増て恩深き養父といふハ武藏なる多塚(おほつか)といふ里の長全兵衛と称者なりしが領主平塚家の内命にて越の長尾へ密使の大役首尾よくなして帰る路松井田宿の野中にて扇が谷の「捕手に出合ひ遁れぬ所」と戦ひしかども那方ハ多勢這方ハ小勢殊に老木の全兵衛なれば終に其場で命を落し夫のみならで大切なる錦の御旗その上に沙金巨刃を失ひたれば豊嶋の家を再興の便宜を其所に失ふて又詮術もなきものから余とて片時も捨置れねば義婦青柳と心を合せ吾侪ハ遠く木柴茹る此鎌倉に忍び居て御旗の在所を尋ねしに今日船樓の催しハ得がたき此身の倅(しゆび)と思へばいと嬉しくて心太くも只一個那船樓に走登り首尾よく御旗ハ手に入りしかども数多の女中に捕圍まれ殊に」⁷ 是なる八代とか名乗りし處女の武勇力量終に刃を打折られ互に組合ふ折こそあれ俄の風に船くつがへり那三重の樓より轉び落ると思ひしのみ夫から先ハ何様なりしか知らで這所まで吹流されお前の情に蘇生し御恩ハ譬へん方もなく身を粉にするとも此恵みを報はにやならぬ義理なれども既に御旗の手に入上ハ片時もはやく豊嶋家へ携へ行て亡父の先の恥辱を清がねバ遺言うけし此梅が草葉の蔭へ言訳なし吾侪が功なる其上ハ身を犬馬の勞にかへてもかならず御恩を報じます斯ういふうちも心急く捕手の女中の蘇生らぬ先少しも速く此場を

と言つ、「お梅が立あがるをマア〜待てお梅さん吾侪(わがし)が一言いふ事ありと言ひつ、這方に仆れ臥たる那八代が起あがるを見るより於梅も又お安も駭き騒ぐを八代がおし鎮めつ、形容をあらため知らぬ支とてお梅さん嚮にハ恩あるお前に對し危ひ事でござりましてと聞てお梅ハ不審顔吾侪に恩を受たとある左様してお前の身のうゑハと問ひかへされて八代ハ涙にうるむ目の縁を袖にて卒度打覆ひ言ふも面なき支ながら吾侪が実の爺さんも多塚村の百姓にて名を糶七と呼れつ、貧しき者で侍りしが三年塚の大病に家財も田畑も賣」盡し斯ても足らぬ年貢の未進欺いて見ても聞ればこそ那強慾な大六殿終に无慈悲に爺さんを牢の中につながられて日毎に不納を責らるれば只さへ病苦のそのうゑに呵嘖に合ふてハ須臾もたまたず僅半月たゝざる間に牢の中に死去(へり)給ひ余ども非道の大六殿猶飽足らでや吾侪等まで牢に入れんと言はれしをお前の親御全兵衛さまのさま〜に執成給ひ苛き命を助りても在所に住居もならざれば吾侪の丁度七オのとき嘯さんと只二個住も馴たる多塚を涙ながらに立出つ、さして行べき方もなければ此鎌倉に倉に聊の由縁のありしを心當に尋ねて聞バ其人もいつの程にか世を去りて頼まん方もあら磯の由井が濱辺にさまよひ來つ詮方なきに親と子が其所に覚悟を極めつ、身を沈んと爲る所を扇が谷家の奥女中繁咲さまといふお方が御代參のお歸りがけ夫と見るより御駕籠の中から吾侪等親子を呼び止め子細を委しく聞れたうゑ情深くも嘯さんと吾侪を館へ伴ひ行

きお部屋の中に養はれ二月三月送るうち倅なきうゑに倅なきハ又噴
さんに死別れ夫から後ハ何處も繁咲さまの御世話にて吾儕が十四に
なる年から下仕」女中に加えられ武家に奉公するからハ物書道ハ
言ふに及ばず鉞術柔術の一手二手ハ知らねバナらぬと隙ある毎に
繁咲さまより教へられ御恩に月日を過るうち御朋輩の妬みにて繁咲
さまにハ奥様より御不興を蒙りたまひ夫が病の根となりて今より
三稔先の秋終に空しくなり給へバ其悲しさと口惜さに袖ハ涙の乾く
間も泣明し又泣暮し日数ハ歴れど忘れられぬ歎きの中に今度の催し錦
の簾を御戸張とハ他の譏りも恥かしく爰ぞ御恩の報じ所と繁咲さま
に心嗣港の噂に支寄せて及ばずながら奥さまをお諫めもせし
甲斐も」なく反て此身に罪を得て御船の中に押込られしに又はから
ずもお梅さんの捕手の役をゆるされて恩あるお方の娘御とも知らで
勝負を争ひしハ危ひ度でござんしたと身の越方を物語れバお梅ハさ
らなりお安さへ感嘆してぞ已ざりける

第廿四回

芦間の忍術暗に錦旗を奪ふ
漁村の扁舟 暁に三女を送る

當下お安ハ嚮よりの二個が言葉をつくつく聞て思はず小膝を礎と打
ち天晴愛度お両女のお物語を聞に付け稟すも嗚呼なる夏ながら吾儕
が實の爺さんハ基鎌倉の商人なれども」利欲に泥む夏をせず武術
を好むのみならず力飽まで強けれバ自と相撲の妙を得て強きを蹙

き弱きを助くる俠客にて在しかバ人にも敬ひ立られしに其身の運や
拙かりけん四十もいまだ越ざるに一稔疫病を煩ふてさま」医療
を尽せしかども終に葉のしるしなく末期の極の枕辺に吾儕を近く
呼び寄せて我ハ素より商人なれども利慾の爲に心を寄せ生涯を過さ
ん事最口惜く思ふにより何卒武士の小官ともなり鎗一筋の主にもな
らんと思ひし事も爲果さで今を最期となりしこと无念といふも餘
りあり其方ハいまだ幼少に殊に女子の身」なれども我存念を受繼で
成長の後武勇をあらはし身をも家をも興すべし遺言事ハ是のみな
れバ必ず忘るな怠るなど言はれし時ハ吾儕ハ五ツ幼少心に悲しくて
如何すべきと思ふうち又噴さんも世を去りて親族とてもあらざれ
バ此腰越に引移り里人達の情にて成長にしたがひて彼の遺言を須臾
も忘れず争武名を顕はさんと思へど未熟の吾儕ゆゑ身ひとつにし
て叶ひがたく神の冥助を蒙らんと此所より程も遠からぬ江の鳶の
弁才天に夜毎に歩み運びつ、祈念に他支ハなかりしに願満日に
及びし夜社檀に思はず」眠りしに忽地音楽の聲と侶に神女の御姿顯
はれ給ひ最清らかなる御聲にて汝美名を世に挙んとするその宿願
ハ空しからねといまだ時運の至らねバ今よりこゝろを勵まして汝
が過世の因縁ある七ツの星に囲り逢ひ汝と侶に八ツの星全く集る
夏を得バ周く四海に名をあげて後の世までも賢女と称れん汝其星
を得んと思はゞ日毎に片瀬川にいたり見よかならず二ツの星に逢
んと宣ふよと思ひしに忽地夢ハ覚しかバ是かならず靈夢ならんと

猶も神前に祈念して夫より神のおしへに任せ日毎に此川へ船を」浮べ待甲斐ありて今日といふ今日お二個さんに逢ひし喜偏に神の導か吾侪がよろこび此うゑなしと語るを打開く八代お梅是又奇中の一大奇事と驚嘆してぞ居たりける其ときお梅ハ両婦に對ひ其お話を聞につけ思ひ合する衷ありとて那青柳が身のうゑの事お齊の尼のおしへの事まで一伍一什を譚り余して見れば此三個もまた青柳といふ處女も腹こそ異れ過世から互ひに結ばる縁あれば今より妮妙の義をむすび苦楽を侶にするならバ嘸頼母しうござんしやうと言はれ

てお安も八代も侶によるこぶ不思議の」¹² 音縁爰に三女を會せしむるも弁才天の冥助なるか量り知られぬ衷なりけり恁て三個の長譚に永き日も稍黄昏て時へ急ぐ群鳥の羽音にお安ハ打おどろき餘り話説に実が入て日の暮るさへ忘れました余ども這等ハ人里遠く洩聞く人ハあらねどもお兩婦さんの御勞をも願はぬ吾侪の心なさ見苦しうとも今宵一夜ハ吾侪の住居でゆるくと何かの話説をいたしませう倅の此宵闇路次を忍ぶに便りもよしと諸侶にと言ひつ、も此方の芦間に舳置たる那網船に乗り移れば二個も續て」乗りうつる其時お安ハ今まで乗り居し小船の舳先に手を掛けて何の苦もなく俯伏にくつがへらせて押流し是で心の残りハなひと言ひつ、完尔と打笑し其力量を感歎して兩婦ハ目と目を見合せつ、最たのもしくぞ思ひける有右てお安ハお梅等兩女を船より丘に登らせつ、その身ハ船を芦間に繋ぎ投網を肩に打かけて兩女に先立案内を為つ、程遠から

ぬ我家の方へ足を速めて急ぎ行跡ハ淋しき薄闇に渺々たる河原のありさま最物凄き折こそあれ右方左方の芦間より現れ出たる二個の婦女互ひに」¹³ 顔をすかし見て・お理喜さん・お友さんか・そして首尾ハと問ひかけられ此方の婦女は完尔と打笑み其所に誤りハござんせん豫て約束した通り吾侪ハ彼方の芦間から始終の様子を立聞にお梅とやらが錦の旗をたしかに所持せし様子ゆゑ透を窺ひ覗ひ寄り習ひ覚へし忍の術にて豫て準備の小包と御旗の包と摺替て則爰にと言ながら懐よりして件の旗を取り出しつ、四辺を見まはし首尾よく奪ひ取りたれどもお梅とやらが心付き今にも尋て來んも知れずお前ハ御旗を携へて些とも速く此子細を」¹⁴ 挿絵第二回」お道さまへ稟あげ御旗をお渡しもふしなバ能お差圖の有ハ必定吾侪ハ爰等に忍び居て今一手段ござんすと言つ、御旗をわたすにぞ那方の婦女ハ受取てそんなら吾侪ハ例の場所へ・ア、合点でござんすと互ひに叫き頷きつ、道を遶て芦原を何所ともなく走せ去りける

作者云 早竟是なる兩個の女ハ善か悪か开も甚麼 後圓に解分るを説得て委しきを知り給へ

却説勇婦お安ハ兩婦を我家へ伴ひつ、圍爐裏の埋火掘出し先行燈に灯を照(ら)し兩婦を其所に安措せその」¹⁵ 身も俱に圓居して最前からの御話説でハお勞れのみかお腹さへ嘸お空食ござんしやう何がな御膳のお菜をと思へど何をもふすにも斯る卑賤世渡りゆゑ思ふのみにて夫さへならずお口に合ぬハ知りながらも初見參を祝くしるし

【挿絵第二図】 妮姪不思議に鋪の旗を窺ふ



片瀬川にて手廻の雑集是など焼てお夜食をと言ふを両女ハおしとゞ
 め辭ふを聞ず立あがり圍爐裏に柴を折焚つ、手づから夜食を安排し
 て最念頃に勧むるにぞ二個も今ハ辭ひかねて其赤心を悦びつ、實も
 主も諸侶に稍夕餞も果しかバ又もや互ひに身のうゑを説つ説れつ」
 閑談に斯須時刻のうつる程にお梅ハ嚮に取りかへせし御旗の包みを
 取出し此一品の手に入るからハ吾儕ハ一旦古郷へ帰り豊鳴のお家へ
 さしあげて親の恥辱を清いだう多過世の縁ある皆さんに復再會を
 遂ませうと言つ、包みを打開けバ鋪の旗にハあらずして中にハ綾
 の女の片袖是ハとばかり打駭くお梅ハさらなり八代もお安も俱に
 仰天して互ひに目と目と見合すのみ呆れてしばし茫然たり其ときお
 安ハお梅に對ひ何ハ兎もあれ大切な御旗を人手に渡してハお前の功
 も無になる道理其盗人ハ」¹⁶ 知らねどもいまだ時刻も遅れねバ尋ねて
 知れぬ夏ハあるまい今から直にお梅さん八代さんも諸俱にと言はれ
 て八代一議に及ばずなるほどお前の被仰とふり一時なりとも猶豫ハ
 されぬ先さし當つて氣掛りハ片瀬川なる昔間の小船那処を一旦尋ね
 たうゑと言ひつ、二個ハ立上るをお梅ハ急におしとゞめお二個さん
 のおこゝろざしハ身に余る程嬉しひなれど吾儕が側を少しも放さず
 大切に守護する御旗を摺替て取るほどの奴放心さ、這辺に居ませう
 かよし又此地に居るにもせよ此所ハ鎌倉へ遠からねバ扇が谷の捕手
 の「人数忍び居らんも量られず余るときハ盗まれし御旗を取り得
 ぬのみならで反て吾儕等三口に不思議の難義あらんも知れずよし夫

とても吾侪ハ覚期恐る、夏ハなけれどもお二個さんをもまきぞへ

せられ志願をも立通さで命を落さバ世の人の物笑ひともなりませう

夫のみならで八代さんハ仮染ながら扇が谷の縁を契たるお身なれば

今こそ吾侪と義を結び苦楽を俱にするととも御旗を俱に尋てハ吾侪

に對して信ありとも扇が谷こそ不仁なれ大恩うけたと被仰た繁咲さ

まへ義が立まい兎ても角でも奪はれしハ吾侪が不覺是非もなし

お両個さんの心ハ知らねど一旦多塚へ赴きて那青柳さんにも様子を

語り再び御旗を取戻す手段を其所に定めませうと義理を説たる才女

が言葉に両個ハ深く感服して終に其意に随ひける其中に八代ハ欣然

として形容をあらため既に先にも稟せし通り七ツの歳に死別れた親

の石碑ハありながら香花さへも備へず此年月を過せしに今時あり

て斯までに世に類ひなき賢女に因みを結びて古郷の親の牌前に手向
る水ハ千部の經にも弥増て草葉の蔭より双親がさぞ悦ぶで「ござん
せうと憊る時にも親を忘れぬ其孝心を感じつ、猶も余談に及ふほど
に春の夜なればはかなくも暁の鐘告渡り鶏鳴東隣に聞ゆるにぞお
安ハ駭き外に出て空の様子を打ながめまだ東雲にハ間もあれバ少し
も路次の小暗きうち若間の小船に打乗て夜明ぬ先に藤沢まで皆さん
お仕度なさんせと言はれて領く八代お梅身繕ひするその間にお安ハ
家内を取片付け一風呂敷に引包みて卒諸俱にと言ひつ、も三個ひと
しく背戸口より船場をさして急ぎける

貞操婦女八賢誌三輯卷之一終」¹⁸

貞操婦女八賢誌三輯卷之二

東都 教訓亭主人編次

第廿一回

戸田の河原に苦七袖を誘ふ
刃塚の知縣に二賢義婦を救ふ

前話不題武藏の國刃塚村の知縣戸塚大六ハ姪行非道の曲者なれば過
し日青柳を搦め捕りてより梅太郎等が詮義ハせて朝暮青柳を居間に
侍らせ酒興に夏よせ種々と艶行ことを言ひかくる其躰曾て公なら
ねバ腹立しくも口惜しくて或ひハ罵り恥かしめ兼諸氣色ハなきもの
から」大六ハ猶徴すまにおどしつすかしつ欺計て其憤怒をはたさ
んと思へど義氣ある青柳の争か不正に從ふべき恚て數日を経るほど
に大六も今ハ堪へかねて青柳をきびしく縛め一間の中へ押込て更に
三度の食事さへ思ふほどにハあたへもせず以前に替りし振まひハ是
みな大六が姦計にて余して苦め置ときハ其堪がたさに自ら心にし
たがふことも有んと斯ハはからひたりしとなん偕もまた神宮屋に
てハ素より異血處女なれどもお袖が容貌の美麗によりこれをおとり
に大家へ取入金金の蔓にありつかんと夫婦密かに相談「して其内心
でありけるに此ほどお袖ハはからずもお張に欺き誘引れ家出なせし
を一筋に梅太郎が連出したりと思へバ先念さ限りなくいかにもし
て取戻さんと思ふ折しも様子を聞バその夜戸塚大六が左兵衛の家に
おし寄せて家財を残らず闕所なし食客青柳を搦捕しと其噂もつば

らなれば夫婦ハ是を聞よりも聊心地よく思へども梅太郎ハ亡命な
しお竹も終に身を遁れて兩個ともに行衛知れねバ意恨ハ猶も晴がた
く敏青柳を拷問させ梅太郎が在家を尋ね怨みを報はんと思ふにぞ」
那大六に金子を贈り頻りに吟味を急げども大六ハ只青柳が艶色に
心まよひいかにもして手に入れんと思へバ是等の支に懸念せず空
しく月日を過るほどに神宮屋夫婦ハ意恨に堪ず金に爲さんと思ひし
處女を誘ひ出されしのみならず五十兩の金までも盗み去られし支
なれば此まゝにてハ濟されず兎ても角ても大六が心に叶ふやうにも
てなし那青柳を拷問なさねバ怨みを報ふ日ハあらじと種々思按を
廻らせしに其頃戸田の川縁に兩個の女乞食ありて其さま妮奴のご
とくなるが髪飴衣粧ハやつれたれ」ども容貌のうるはしき事鄙に
ハなか／＼有がたしと噂する者のありければ神宮屋夫婦ハ是を聞よ
り一つの謀計をもふけしかバ早速家の老僕なりける苦七といへるに
所存を明し夥数の錢を齎して戸田の川縁に赴かせつ、件の乞食に夫
をあたへて密にたのみたき事あれば今宵神宮屋まで参るべし支なる
うゑハ褒美の金ハ兩人が望みに任せんとひそやかに言聞せければ
二個の乞食ハ思はずも多くの錢を貰ひしのみか此塚家にて分限者
と名に聞へたる神宮屋より斯念頃に呼る、支ゆゑ何か」子細ハ知ら
ねども褒美と聞て打欣びいかにも今宵参るべしと両女が答に苦七
もよろこび猶左右と約をなして急ぎ神宮屋ハ立帰り主に首尾よき
を語りつ、其日の暮るを待ほどにはや晩鐘もいつか過ぎて夜も初更

にぞ及びける其とき神宮屋の裏口へ忍び寄り来る以前の乞食苦七
ハ夫と見るよりも豫て手練を定めし事ゆゑ庭づたひに案内をなし
夫婦が居間に伴ひ行て密に斯と報知れば、主夫婦ハ端近ふ椽先に
立出つ、両女が容貌をつくづく見るに實聞たるに弥増せし風俗」
のみか立居振舞賤しき者と思はれねバ主ハ深く欣びつ、那袖乞を
さし招き汝等兩婦を呼び寄せしハ深き子細のある支ながら何に寄
らず我言ふこと頼まれてハ呉まじきかと言はれて両女ハ臆する色
なく吾侪等如き賤しき者を人らしくも呼び寄せられ斯念頃に宜ふもの
を假令いかなる支にもせよ身に叶ひさへする支なら仰せハ背きも
ふすまじと言ふに主ハます／＼欣び先彼兩個に浴させ新に衣類を
あたへつ、一間の中に件ひ行き酒食を出して饗應たるうゑ四辺の
人を速ぎけて主ハ言語を密一つ、憑みといふも他ならぬど筒様、
の支により一個の處女お袖をバ梅太郎が爲に連出されしにその夜
また如此の支ありて梅太郎が家を闕所せられ食客青柳といへ
る處女ハ其場にて召捕られしかど那梅太郎が在家ハ素より妹お竹
も遁去りて終に行衛の知れざれば我怨みハ猶晴がたく余と他に
手段もあらねバ當所の知縣大六どのに金銀夥数を賄賂して那青柳を
拷問させ梅太郎等が在家をバ白状させて擲捕此夥憤を散せんと思
ひしかども如何にせん大六どのハ「青柳が只艶色にのみ迷はれて
吟味の沙汰も有されバ斯ていつまで在たりとも意恨の晴る、日ハあ
らじと思ひしゆゑに種々と日夜心を苦しめしにはからず汝等兩女

【挿絵第三図】

苦七戸田河原に乞食を説く



を得てひとつの奇計をもふけしなり其子細ハ別義ならず汝等を彼所に連行此者ハ鎌倉なる由縁の人の處女なるが薄命にて親に死別我等が方にたより來て何れにも佳方へ奉公為たしと望むゆゑ不都東者にハ侍れども若思し召もあらんにハお側の塵をも拂はせ給へと言語を工みに勧めなバ素より好色の大六殿ゆゑかならず両女を抱へ」【挿絵第三図】「らるべし其とき汝等心を合せ大六殿を甘言欺計折よくハ青柳を拷問さする様に爲べし若夫とても心迷ひて拷問すべき氣になくバ折を窺ひ青柳を入置一間に忍び入り密に彼嬢を盗み出し我方へ送るべし余する時ハ此方にてきびしく彼嬢奴を貴問ひて一々白状させたるうゑ憎しと思ふ梅太郎お竹も俱に搦め捕り今の怨みを晴すべし然ハ言へ是等の秘笈を大六殿に推量てハ勞して功なきのみならで我身のうゑにもかゝる夏ゆゑ假令青柳を盗み出すとも誰が所爲とも知れざるやう必ず心を用ゆべし其時にハ」。我方にも豫て手練を定め置き首尾よく那嬢を奪ひ去なん憑みといふハ此事なりと言はれて二個の袖乞ひハ思はず莞尔と打笑て如何なる夏かと思ひしに青柳とかいふ嬢公を拷問さするか連出すか二ツに一つの今のお頼み筒様に稟さバ何とやらん嗚呼なる者と笑はれんが吾儕等兩個も腹からの袖乞ひにてハ候はず親ハ京家に仕官して由所ある者にて侍りしが讒者の舌にかけられて終に浪人の身となりゆき夫れより諸國にさまよふうち双親をさへ死去て寄方なければ是非なくも斯る賤しき業もしつ僅に命を」つなげども悲しさ難面さ堪がたく人に情のあ

るならば如何なる方にも身を寄せて争此苦を遅れんと思ひし甲斐にはからずも今宵此家へ招かれしハ吾侪等二個が身の僥倖命に替ても力を尽し首尾よく爲遂し其うゑでハ何卒二女が身の落付偏にお願ひもふしたしといふに主ハ打点頭思ふに増たる両女が種性質いかにも頼みし大役を爲たるうゑハ望みの隨意よきにはからひ得さすべしと言ひつゝ、妻にも其意を得させ新たに衣裳を調へて兩個を美々しく粧はせ次の日自ら大六が邸へ両女を伴ひゆき豫て「約束せし如く如此きのよし言ひこしらへて両婦を目見に出せしに按に遠はず大六ハ美色をよろこぶ姪行者ゆゑ忽地両婦を召抱ゆる旨返答に及びしかバ爲すましたりと神宮屋ハ心中密かに歡びつゝ、そこへして立去りける有右しほどに大六ハはからずも佳人を得てはや塊も身に添はず心頻りに放氣にぞ其夜俄に酒席をもふけ件の両個に酌を取らせて既に数献に及びしに彼處女等ハ肚裏に思ひ設けし支やありけん言話をたくみ興を添へて猶も數盃を吃するにぞ謀計とハ大六が鈍くも」思ひ知らざればはいよく大吃ますゝ酔て終に席にも堪がたくや其假其所に打臥て果ハ軒となりける當刻ハ夜も稍更て子の時ばかりになりしかバ家内ハ都て寐しづみて大六が辺りにハ只那兩個の處女のみ他に扈從ふ者もなければ兩個の處女ハ大六が辺りへ卒度忍び寄り寐息を須臾考へて顔見合せつゝ、完余と打笑みまんまと首尾よくお安さんお前の智慧で易々と此家へ入込む而已ならず此邪智深き大六奴を・お前と兩個の口先にて欺して酔せたう

ゑからハ這奴ハ寢早死人も同前此間に速く」八代さん・なるほど彼是手間どつて目を覚まさせてハ面倒ものそんなら直に青柳さんをひとまの中より救ひ出し豫て手練を爲た通り那片村の一家へ・伴ひゆきてお梅さんに何かの様子を咄したうゑ落付先ハ後の事とハ言へ知らぬ此家の勝手若右往左往と迷歩て咎められてハ一大事と言を八代おしとゞめ。其事ならば氣遣ひなし霄に吾侪が侍婢を欺して置ましたが儘に奥の小院とか這所から直に庭つたひにサアござんせと立あがる最も賢き八代が才智に驚くお安さへ侶に下立庭面の其月代が八代ハ先に」立つ、小院をこゝろざしてぞ忍びける

第廿二回

三女暗夜に走て群館を騒す
奸夫奸夫を計て反身を亡す

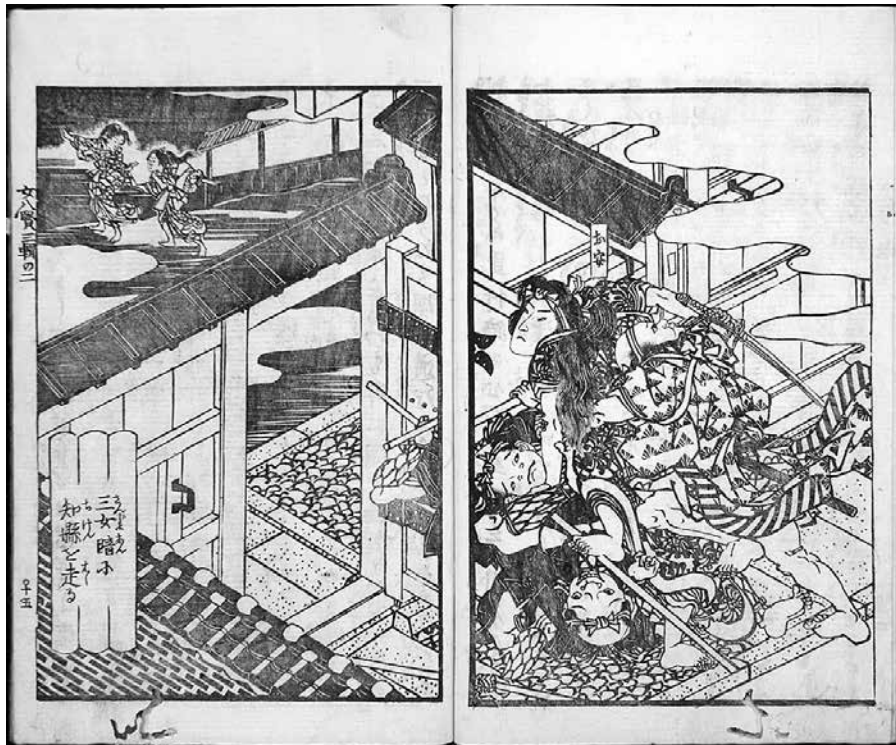
却説青柳ハ斯るべしとハ神ならで知るよし絶てあらざれば明暮難面大六が仕方も邪姪の叶はぬ仇と思へばいとゞ腹立しく余れども遁る、道のなければ若此まゝに賊手にかゝり命を捨なば是までに思ひ立たる宿願も亦梅太郎と義を結びし言話も空しき露と消死しての後まで本意なからん然ハいへ放心きく如右てあらバ終にハ命を失なふべし」余らんハ賊手にかゝり耻に耻を重ねんより自ら死ぬるが増ならん勇者ハ死を見ておそれずとか女子に似氣なき支ながら死すべき時に死せざれば死にも増たる耻とやら、夫がよいと心の中にハ思へども身ハ縛の蔦かづら我身で我身の

自由ならねバ死ぬも死なれぬ因果を慰むる人もあらし吹寒の
衣身を冷し枕さへせて鬱々と物思はしき折こそあれ誰かハ知ら
ず入口なる銅戸を卒度押明て忍び入り来る二個の處女這方ハ不審
の晴ざれば聲をかけんとする口をおさへて手速く青柳が「縹緲を
伐り解き耳に口寄せ叫くを青柳ハ聞よりも或ひハ呆れ且欣びそん
なら兩個のお女中さんもやつぱり過世の縁ありてお梅さんと因み
を結び此多塚へお出のところ神宮の家の大變と私の難義をお聞ゆ
糸姿をやつし入込んで酒食にふける大六ゆゑ計りおふせて易々と
手繰透へず吾儕をバ救ひ出して下さんしたかシテお兩個のお身分
ハと問ひかけられて八代が那吾儕等ハ鎌倉でと言んとするをお安
がおし禁其お話ハ跡でもなる事爰にあんまり問どつて若大六
か余もなくとも家内の者が目を覚さバ是まで折角」¹⁰爲おふせた
手繰も水の泡となり反つて難義にならうも知れぬ八代さんハ此間
に速く青柳さんを伴ふて爰かまはずと裏門から那村尾の草屋へ
と言はれて八代打領きそりや合点でござんすがお前ひとりを残
してハと言ふをお安ハおしとゞめナニ氣遣ひハござんせん吾儕が
爰へ残るのも若大六が目を覚し追手をかける時の爲ゆゑそんな度
にハ懸念なく倅ひ雲に入る月の小暗きうちに卒敏くと急立てられ
八代も又青柳も聲ひかねつ、手速く小袂取上て密に立出る裏門口小
ぐらき方に身を寄せて「潜戸卒度」¹¹推明つ、既に出入とする折しも
此物音に駭き覚けん庖所の大戸押明て僻者待と言ひつ、も用心棒を

打振き、現れ出たる兩個の小僕青柳と八代を敵仕さんと彼是めくを
跡より徐々忍び来るお安ハ夫と見るよりも飛鳥のごとく駈寄つ
て二個の男の襟がみを掴んで此方へ引戻し、爰かまはずと些どもは
やく・そんなら跡を憑むぞへ・アイ合点でござんすと言ふを後ろに
聞捨てて兩個ハ先へ走り行く其時二個の小僕等ハお安が腕を振りはな
ち猶懲すまに打かゝるを右と左へ引外シト身を寄せて突出す掌の
當身に二」¹²個の男ハ須臾も得堪ず仰向にウント言ひつ、忤るゝを
見向もやらす裾はせおり青柳等に追ひつかんと足元見へぬ薄闇に
千草百草踏分て頻りに路次を急ぎつ、二町三町來し折しも片辺に茂
りし笹原よりあらはれ出たる一個の癖者頭巾目深に冠りしかバ男か
女か知らねどもお安の姿を透し見て打点頭つ、亦以前の小篋の中に
ぞ隠れける作者はいく此曲者のかへて却説また大六が郡館にてハ嚮にお安にな
やまされし二個の小僕ハ稍須臾俱に氣絶や爲たりけん起もあがらで
居たりしが既に半响ばかりにしてやうやく「蘇生しかバ打駭きつ、
四辺を見るに那お安等ハ何地へ往けん更に影だも見へざれば互ひに
目と目を見合すのみ又詭術もなきものから然ハとて止むべきにあ
らざれば急ぎ大六が居間にいたり度如此々」と報知にぞ其時までも
大六ハ猶熟睡して居たりしが今此知らせを聞よりも俄然として起直
り且駭き且怒りて偕ハ女子と氣をゆるさせ大切なる罪人を奪ひ去
られし口惜しさよ是みな神宮屋平左衛門が深くも謀りし度ならめ余
もあらバあれ此報ひ今にぞ思ひ知らせんとて忽地人數を準備しつ

大六自ら先に找みて夥兵等に「¹²下知して言ふやう汝等手續き働して捕逃さんもはかられねバ各々刃を抜連れて家内の奴等残りなく皆悉く砍尽して彼青柳等三個を再び首尾よく取かへすべし心得たるかと言ひつゝも軀て件の神宮屋なる表口より裏口より三七二十一に砍入るにぞ思ひがけなき夏なれバ廊と庖所に熟睡せし雜人小僕ハ周章騒ぎて喃盜奴よ泥坊よと叫ぶを這方の夥兵等ハ躍りかゝつて砍りまはる這方ハ多勢那方ハまた不意をうたれしのみならず雜人どもの甲斐なきハひとりとして敵對者なく我先にと」¹³逃廻るにぞ那夥兵等ハイよゝ勇みて或ひハ袈裟掛腰車またハ肩先膺掌其さままを切るごとく瞬間に十四五名枕を並べて死したりける余れども戸塚大六ハ神宮屋夫婦に出合ず況て青柳等三女の何れに隠れ居るを知らねバ猶も夥兵を励まして奥と納戸を心ざし會釈もなくぞ砍入ぬ案下神宮屋平左衛門ハ有右べしとハ露知らで嚮に二個の袖乞に高計を示して郡館へ奉公させし夏なれバ近きに青柳を拷問さするか余なくバ密に連出すならめ然るときハ左やせまじ右やせまじと姦計に夫婦額を集めつゝ閑談数¹³刻に及ぶほどに更行鐘に心つき夫婦互に臥房に入しが忽地家内騒々しく小僕の呼び叫ぶ聲耳に響きてすさましく何夏やらんと起上り準備の手鎗を引提つゝ身構なして居る所へ間隔の襖蹴はなして先へ找みし戸塚大六夥兵を後方に従へつゝ聲高やかに喚はるやう汝姦賊いかなれバ我恩沢を蒙りて数年當所に家居を構へ商賣に利を貪りながら其恩報ハ思ひも

せで素性知れざる婦女をかたらひ我を計りて熟々と重き罪ある青柳を奪ひ去らせし汝こそ賊婦が増たる罪なりかし頓三女の賊婦をわたし」【挿絵第四回】¹⁴我縛めを受なバよし不の字を言はゞ汝等をも小僕に等しく砍尽して後に賊婦の在家を尋ねん余でも白状せざるかと言はれて駭く平左衛門お踏も俱に仰天して偕ハ二個の袖乞のまんまと青柳を連出したるに追手の人数に迫られて我方へハ來る事叶はず他方へ走りしものなるか然にても連出すならバ豫て手練をなさんと言ひしに女子の淺き心から慙なる夏爲出して毛を吹て此大疵を求めたる物ならんと流石姦智の平左衛門も那二個の袖乞をお安八代¹⁵の二賢女と悟らぬも現に道理なり憊てまた平左衛門ハ夏¹⁵破れと思ひしかども遁るゝたけハ弁舌にて言ひ遁れんと思按しつ妻にも急度瞬目して大六に打對ひ思ひ寄せざる御難題小拙夏ハ梅太郎に處女を奪ひ去られしゆゑ其遺恨やる方なく争で青柳を拷問なし梅が行衛を尋ね求めて今の恨みを報はんと思ひこそすれゆゑもなく仇に組せし青柳を救ひ出すべき所謂なし是にて賢察あるべしと言はせもあへず大六ハ忿然として眼を睜り汝何程言語を工み我を惑はさんと欲するとも汝が方より口入せし兩個の賊婦が青柳を奪ひ去りしが慥な證據斯くも遁るゝ道ありや」汝がごとき白徒者を白状させんと問どるうち大事の賊婦を捕逃さバ千度悔ゆとも詮なからん夥卒這奴等夫婦を殺して先我怨みを晴させよと言はれて駭く神宮屋夫婦猶言ひ解んとする折しも頭の令に従



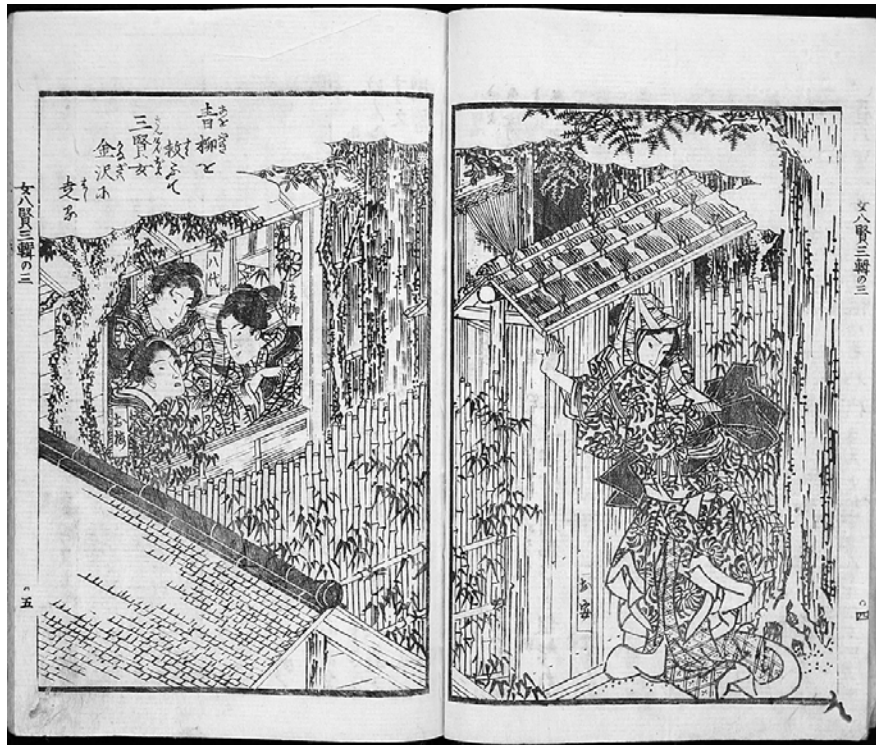
三女暗に知縣を走る

ふ夥兵等各々得物を打振うちふりく夫婦を中に捕稠とろんで討てとるべき勢いきほひに平左衛門も今ハしも奸口利弁けんこうりべんを用ゆる間なく妻のお踏かみを後ろうしろに囲かこひ手鎗てやりをもつて防ぎ戦たたかふ勢いきほひ剛がうにハ見ゆるものから素より武道ぶだうを知るにあらねバ多くの夥兵くみこに砍きりたられ薄痕うすでしご四五ヶ所肩かたひしかバ防かたぎがたくや思おもひけん引外ひっぱして」逃にげ出すを大六透だいごくすかさず飛びか、つて肩先かたさきより乳ちの下したまで後袈裟うしろげさにぞ砍きり下げたり此有様このありさまに駭おどろき怖おそれしお踏かみハ心こころも身に添そはずされども猶豫ゆうよする場所ばしよにあらねバ爰こゝぞ一生懸命いっしょうけんめいととりて捕手とりにての中なかを潜くづり抜け逃にげれんとすれども女子むすめの甲斐かひなさ終ついに右より左より眉間まゆま肩先かたさき嫌きらひなく盲手めつたぎ砍きりに砍きりなされ其所そこに命いのちを落おとせしかバ大六ハ心地こころよげに夫婦ふうふが死骸しかがいを見やりつ、猶なほも夥兵くみこを勵はげまして家内やうちを殘のこらず尋たずぬれども那三個かのえにんの處女おとめハさらなり婢女めかけ等らも惣すべて逃にげたりけん人影ひとかげさへも見みへざれば大六ハ憤いら怒だつのみ終ついに望のぞみを失うふて又また詮術せんすべもなき俣まにつくく思おもひ廻めぐらせバ我一朝われいちやうの忿いりに任せ神宮屋かみみや夫婦ふうふを殺ころせしかども賊婦ぞくふの行衛ゆくゑ知しれざれば其尾そのをを砍きつて頭かしらを放はなすの理ことわりに似にて今更いまさらに猶なほ鬱憤うつげんハ晴はれがたし兎とても角かくでも此俣このまにて賊婦ぞくふを取とり戻もどさずバ我一分わがいちぶんの立たざるのみか他の批判ひはんも免まぬれず余あらバ今より手分てわけを為なして近郷きんきやう近在隣國きんきやうまで尋たづね求めて擲捕からめり今いまの思おもひを散さんぜんと俄にわかに手繰てぐりをなす折おりしも忽たちまち地大六だいろくが郡館ぐんくわんの方に猛火みやうくわ盛もんに燃もえあがり天てんをも集こ集くす勢いきほひなれば大六再び打駭うちおどろき邸かたの方に失火しつぷあ有あぞ」夥卒おともしら急いそげと言いひつ、も慾よくに目めのなき大六だいろくなれば一品ひつしなにもせよ我品わがしなを焼やいてハ損そんのうまる瀬せなしと處女おとめが詮義せんぎも打捨うちすてて息いきをもつかず走はせ去さりける

夏すべて尼公に宿因あるその² 聚略を説示し夫につけても无念な
ハ折角手に入る錦の御簾いつの程にか摺替られ似ても似つかぬ此小
づ、みと言ひつ、腰に付たりし帛包を取り出し中にハ綾の片袖が
入れてあるゆる若萬一鑿義の手蔓にならうかと思へバ今に捨もせ
ず携てハ居るもの、今まで苦中の苦を堪ひ命にかけて取かへせし
御簾を鈍くも摺替られ言甲斐なしと人さんに思はる、さへ面なきに
青柳さんハ取わけて松井田宿よりはるぐと世に亡親の遺言まで
傳へしものをと口惜しくも腹立しくもござんせう余ハ言へ今さら
百千度悔とも詮なき吾侪の不幸只此上ハ」皆さんの思し召こそ願は
しと始終を聞いて青柳ハ慰めかねつ稍須臾溜息ついて居たりしが思ひ
かへしてお梅に對ひ大支の御簾をうしなひしハ最も本意なき事なが
ら過世の縁ある御両女に邂逅しも不思議の俤今より四個が心を合
せ隈なく尋ね求めなバ取かへす日も遠からし夫より先に問ひたきハ
お前の養家の騒動と吾侪が知縣へ捕はれしをどふして知つてござん
したと言はれて八代小膝を找め其疑ひハ余る事ながら日外腰越を
立忝りてより心急くま、路次をいそぎて其次の日の黄昏に此塚
に近寄折しも俄に降出すむら雨を霎時さげんと³ 立寄りし木影に
計らず出會し老女お梅さんとハ知己にて這回養家の騒動とお前の
難義の一伍一什箇様と報知られて駭く中にもお梅さんハお前ハ
素よりお竹さんまたお袖さんの夏さへも按じハ嘸とおもへども他
に思按もなかりしと言ふをお梅ハ語をついて其折會た老女といふ

『貞操婦女八賢誌』

ハお前もかねぐ噂に聞く長堤の孫三が実の妮夫ゆる吾們三女を
最念頃に慰めて此家へ密かに伴はれお前を救ふ相談にさまぐ心
を勞せしかども吾侪ハ以前と姿ハ異れど知縣の鑿義厳しけれバ昼
ハ里へも出る支極はず八代さんとお安さんのみ終日四方を」**挿
絵第五回**」⁴ 走廻りて緯の様子を窺ひしに心に浮む夏ありとて
一ツの音計を新作意その次の日よりお両女ハ仮に袖乞と身をやつせ
しに終に謀計其圖に當り今宵の本意を遂られしこと皆お両女の方寸
よりたくみ出せる所なりと聞いてよろこぶ青柳ハ厚き情を感じける
斯須あつて青柳ハ嚮にお梅が取出せし帛包を打ひらき中なる綾の
片袖を左視右視つ、訝かし氣に稍うち按じて居たりしが心に思ふよ
しやありけん完尔と笑つ、打點頭慥におほへの此片袖是と御簾と
摺替たらバ其盜人も大かたハ心當りがござんすといはれてお梅も」
八代も膝のす、むを覚へぬまでに青柳の顔うち守りて、何か様子
ハ知らなひが此片袖が手が、りとハ奈何なる子細ぞ教へてト問は
れて此方も膝おしす、め、**挿**「サアそのわけハ長い事過頃七月の中の
五日お前が首途ありしより四五日を経るほどにお袖さんハなほさら
にお前の事のみ思ひくらしして終にお張にたばかられおなじ月の末
の五日に湯が嶋の祭礼を見物に事よせて筒様⁵の緯ありしそのと
き私も湯立を見んとて湯が嶋にいたりしにはや緯すみし跡なれば
本意なく思ふ戻り道丸塚山へ來しときハ日ハ入り」はて、宵月の木
の間をもちりて照り渡る折しも向ふにあやしき人影様子奈何にと窺ふ



青柳を救ふて三賢女金沢に走る

に云々の事ありしを彼お張がお袖をとらへ手ごめにしたる條より
 仙女真弓がお張を殺しお袖と名乗りあいにし事且お袖ハ真弓が實の
 妹なりし叟その父の事母の事お袖が節義真弓が至孝また真弓ハ錦の
 御旗をもて父の仇なる扇が谷を狙ひ撃んと思ふによりお袖が望みに
 応ぜざりし事其時青柳ハ錦の御旗とり復さんとて真弓と挑み戦ひし
 折あやまつてお袖を深谷へ落せし事夫より猶もあらそひしに真弓ハ
 不思議の術あつて「小篋の中へ飛入りしま、影を隠してついに見
 へず其所に望をうしなひしかバ獨り冢塚へ戻る道にて鐵八に行會ひ
 つ、神宮の騒動を聞きゆゑまた如此にはからひてお竹を鐵八に
 委置き其身ハ冢塚の家にいたらんとせしに大六のために捕はれしそ
 の叟の終りまで一伍一什を物語り 昔、其以前丸塚山にて神女真弓
 と挑みしときたしかに見出た綾の小袖に寸分違はぬ此片袖ぞうして
 見れば那御簾ハふた、び真弓がうばひしか夫れとてもはかられず
 ト聞てお梅も八代も側聽せし老女さへその英才と明弁を歎賞するの
 み又さらに思ひ兼「てぞ居たりけるそが中に八代ハ心にうかみし事
 やありけん思はず小膝をはたと打、青柳さんのお話語で思ひあ
 はせる事がござんすその子細ともふしますハ私がいまだ合が谷の
 奥につとめて居る時分十六七の一人の娘その名もたしかお道とやら
 錦の簾を奥さまへ進るを功にお側つとめを願ひのとふり免許されし
 に基より理發の娘ゆゑ奥さまのお氣に入りて夫から思召つかれた
 那御戸帳の船樓そふして見るとお道とやらハまことハ仙女真弓にて

御旗をおとりに合が谷へ近寄る手段でござんせうト迭に意中を語り合ひ稍時うつる折こそあれ、外面の方より聲高く、這所ハ塚塚の里ちかきに郡館への間へもおそれず忍び咄しハ膽太しト言はれてみなくうち驚く折しも門の戸おし明て這方へ入来る婦女あり是則お安なり其時お安ハ人々にうち對ひつゝ、完介と笑ひ、私が今の大聲を嘸腹立しう思はんせうが爰であんまりなが話説して萬一追人のか、つた時ハ後悔先に立ずとやら夫ハ言はずと皆さんが敏心得てハござんせうなれども智者にも一失とか其所を思ふて那樣に驚かしたも隔ぬ心かならず惡しう思はんすなト言れて皆婦心落着てお安が頼才に感じつゝ、果ハ笑ひを催しける」其中に青柳ハお安に對ひて容を正し、「最前ハ事繁くて再生のお禮をばるくく稟す隙もなく其俣にして過ました今宵の御恩ハ生を變ても忘却ハいたしませんトいふをお安ハ聞あへず、互ひに宿因あるものを救ふのも救はれるも頼母づくでござんすものを恩の義理のが入るものでト清きお安が言の葉に青柳ハなほ感佩して樂しき事に思ひつゝ、しばらくして又言ふやう、過刻私と八代さんが郡館を立出るとき跡をお前に振り任せ其俣爰へまゐつた跡にて何も故障ハござんせぬか心が、りでござんしたト言へバお梅も八代も奈何と尋ぬる」にぞお安ハ聞つゝ、うち點頭、那時跡ハ引残り二個をその場で打倒せし後ハ挂へる者もなければお前方におくれまじと道を急ひて此家の門へ來つゝ、様子を窺へバ皆さんのお話語最中夫々態と這入

らぬハお話語の腰を折んも心なく又ふたつにハ迫手の者がし來らんもはかられねバその要心をも思ふゆゑ外から委細のお話語を今まで聞て居りましたト言れて皆々感歎しつゝ、最頼母しくぞ思ひける、作者いはくお安かこの家へ來る道にて笹原より曲の出てお安が姿をうかひ見しこと既に二の巻の末に出たりされどもお安ハそれを知らねバ今こゝにははず後に至りて、詳かならん却説また此家の老婦ハ衆婦の明論義談を聞毎度且驚き且感じつゝ、歎賞「するのみいまだ一句も出さざりしが此時漸々後方より膝をすゝめて四女に對ひ、貴婦がたのお話説ハ私が口を出しますハ片腹痛うござるませうが私の在所ハ鎌倉に程遠からぬ金澤の瀬戸ともふす片田舎にかすかに消光て居りましたが夫にはやくわかれ跡へ残つた二個の娘お理喜お友といひますを手ひとつで育てるうち縁あつてか娘等ハさる大家の婢女づとめ首尾の能を僥倖に瀬戸の家をバ他に譲り一人の才を心當に此塚塚へ引移り纔に一稔を過るうち主家に大變さし起りてちりくばらくなり行たまひ二個の處女の、行衛さへ定かに知れずに居りますゆゑ案じ煩ひ年を経しに此頃風に様子を聞バ娘等二個ハ以前住居し金澤へ身を落つけ細き煙りを立るよし夫から私が思ひ付た貴嬢方のお身の落付今お話語の様子でハ錦の御旗の盗人も鎌倉うちに居るハ必定そふして見ると鎌倉へ忍んで御旗を尋るにハ金澤ハよい隠家しかし出過ぎた私の猿智恵おかしな婆とお笑ひなく若お心にかなひしなら認め置た此文を娘等にお渡しあらバ急度お世話をいたしませうト、言つゝ、片側の芋桶の中より心の真実巻こめし文を手ばやく取出しいざとて」お梅

が前に置真心見ゆる言の葉を四婦八聞つ、欣喜感じお梅ハ文を取り
おさめて、今にはじめぬお前の深切其お言葉に隨がつて是
から直に金澤の瀬戸とやらへ尋ね行二個の衆に會つた上何かの事を
ナア衆婦さん、なるほど夫が宜うござんす、そんなら直に旅立
の用意ハ、にござんすト言つ、取出す管笠草鞋、何から何
まで抜目のなひ、お禮ハ言話に尽ませぬト言つ、皆婦立あがり
草鞋履手もかひくしくやがて戸口へ立出るを止めかねたる老女よ
り四個も名残のおしまる、を思ひ直して菅笠に隠す露草を踏分
ながら足早に南をさして辿り行く」

第廿四回

清水を汲て義婦短刀を拾ふ
月夜を走て孝女孤忠を聞く

武州久良岐郡六浦の莊金澤ハ大道村耕地の西往來の右の方なる岩
石に切り付たる地藏の鼻筋をかけて西を相州東を武州とす故に鼻
かけ地藏またハ界の地藏ともいふなり鎌倉志に陰陽権介國道が
東鑑を見るに六浦ハ鎌倉四境のうちに入りたるをもつて四境ハ
則鎌倉といふべしとありしかれども凡例にハ金澤は武州にして
相州にハあらず昔實時頭時居住ありてよりじつに一郷のごとし
亦金澤を家号とするも此時よりの事なりと」あり今この編に瀬戸の
地を中央にとり是より次才に東西南北村々及び名所古跡をわかつも
のハ明神の勸請諸社諸山に先だつを以てなりまづ明神の前より西

ハ六浦村大道村三艘村北ハ釜利谷村谷津村南ハ野島村東ハ洲崎村
町屋村寺前村小柴村富岡村中里村水取澤村是をすべて金沢十三ヶ村
といふ其外ハ所々の小名にして一村にハあらず亦むかしより這金澤
に西湖のおもむきありといふ其誦する詩歌も彼瀟湘の詩歌にし
て其作者ハ歌を藤原の為相卿詩ハ唐僧堂玉潤なり其風景に比する
名所ハ小泉を夜の雨とし。洲崎を晴嵐。乙友を帰帆。平汚を落雁。
野」寫を夕照。称名寺を晚鐘。瀬戸を種月。内川を暮雪。とす此
外に四景あり。瀬戸の二橋重山の春花。海上の落花。能見堂の晝
すべて是を十二景と言ふなりと云、以上金沢名所、時しも弥生の未なれ
ハ四方の桜ハ咲乱れまんくたる蒼海峨々たる高山春の景色を持だ
るハなく君が寄のひとつ松ハ霞こめて釣たる、扁舟濱西にたゞよふ
眺望一時に尽しがたしさるほどにお梅青柳等の四賢女ハ塚の里を
はなれてよりさして急ぐの旅にあらねバ名所古跡を遊覧しつ、其
うちにも錦の御旗の手が、りもあるべきかと心を付て行ものからは
ぞと思ふ事もなく翌日申の刻、過るころ同國金沢なる富士坂を越て

能見堂の辺へいたりしかバ霎時這堂に立寄りて四方の風景をも一覽
し且ハ遠路の疲労をも休めんと思ひにけれバいざとて四嬢諸俱に堂
の檜椽に腰うちかけ這絶景を左右と余念もなく詠めて居り其時お安
ハ後辺より進み出て人々に向ひ、あんまり景色の見事さになん
さんに嗟さうと思ふ事さへわすれました其子細ハ他でもない私が今
がた此跡の富士坂を通るときしきりに咽が乾くゆゑ清水に口を潤を

さうと道の片側の山水を手にむすびつ、吃んとするとき那方に茂りし小草のうちに一振りの短刀あり不思議に思ひ手を伸してとり」¹² あげ見るに表装も拙きものと見へざれば拔はなしてよく／＼見るに長さ八尺に足らずといへども拔鞞の鋭刃ならんと思へば流石に捨かねて落たる物を不拾と聖の道にハあるとか聞けども斯て朽んハ无益なり今さし當つて青柳さんの身に寸鉄もなきものを此短刀の主の出るまで須臾此方へ借りうけて今さし當る用に充んと思へばその俣携へて即窆にト言ひつ、も帯の間より取り出し青柳にわたすになん衆皆聞つ、欣喜感じ今にはじめぬお安が奇才を歎賞のほかなかりけるその中に青柳ハ悦びの色面にあらはれ稍短刀を請とりつ、幾回おし載せてつく／＼見つ、不審氣にお安の「辺りへす、みより何様も不審な此短刀表装を見ておしはかるに無銘なれども長船にて若刀尖から一寸手前に少しの瑕ハござんせぬ坎ト問はれてお安ハ驚きながら「なるほどお前の察しの通り少しの瑕がござんすがそれを何様して青柳さんが「サア夫にハいろ／＼子細のある事私の實の爺さんハ丸塚さまの元の老臣菊坂小六ともふすもの過し嘉吉の戦ひ破れ御家没落のその砌り爺さんの末期に及び私を側へ呼び寄せて遺言ありし其折に此短刀の事簡様ミと言はれた事を心にしめて片時忘れぬ這短刀ハ基丸塚家の重宝なりしを爺さんより三代先なる」¹³ 菊坂嘉門といふ人の時軍功によつて拜領あり夫より家の重宝として幾年月を送りしにお家没落のその以前識者の爲に

御不興を得て爺さんの休役の折短刀をさへ召あげられしに何人の手に落入し其後行衛ハ知れずなりしを残り惜しく思はれしにや繰り返しつ、宣ひしに今はからずもお安さんの恵みに私の手に入たハ千万金にもまさつた賜物有難いとも嬉しいとも譬へる物ハござんせぬト言つ、欣喜青柳の心を察してお梅等も俱に眉をぞひらきける却て物語りはてしかバ又もや余談におしうつりしばし疲労をやすめ居り其時八代ハ四辺を見まはすに堂の「挿絵第六回」¹⁴ 那方の小高き所に遠眼鏡を掛けて詣づる人にハ放に見するよしを書付あるにぞ戯れに立寄りつ、遠眼鏡を引よせ見るに間遙けき麓路よりして山川草木いへばさら也人家に烟の立るまで手に取るごとく見へにける浩る折しも宝藍染の単衣を着にまどる管の小笠を手に持し旅装束のひとりの處女洲崎の街を這方へと歩み來るありけるが八代ハ心ともなく熟々見るにはからんや那扇が谷家に身を寄せせしお道にてありければ瞬もせず猶よく見るに終に姿ハ木隠れて往方も知らずなりにけり残り惜しさハ限りなれど斯て詮方もなきま、にお梅「青柳お安等に簡様ミと物語るにぞみな／＼聞つ、歎息しなれバ終に望みをうしなひぬ折しもあれ青柳ハ心に浮しことやありけん人々にうち對ひ「お梅さんや皆さんハ何様お思ひか知らなひが爰から麓の街までハ遥の道とハ言ながら心を揃へて急ぐなら若其人に逢ふことの千にひとつもあらうも知れぬ是にて思ひ合す



能見堂に四賢女風色を觀す

れバ最前巷の風聲に合が谷の殿さまが此程鎌倉へ在着あり今日し
 も祈願の事ありて當所称名寺へ參詣あるよしそふして見るとお道
 さんもこゝらわたりを徘徊し「姿をやつし隙を窺ひ爺さんの怨を
 復し埋れし家を起さんと謀る事のなきとも言れず然ハ言へさきにお
 道さんハ一旦花の方の奥勤を許容されしうゑからハこゝらわたり
 を旅装束で歩行しやんす筈ハなひが是にハ子細のある事かそれか
 あらぬか不審しし何ハ兎もあれ麓へ下り若仇打の様子あらバ余所な
 がら力になり其うゑで何かの事を「なるほどお前のお言の通り
 爰で彼是氣を揉ふより些もはやく麓の方へサアござんせトお梅が
 言葉誰か一議に及ぶべきみなく「即時に同意して能見堂を立出つ、
 桮をさして辿りゆく不題花」¹⁶ 方の奥へ立入りし那お道ハ定正に
 近寄りて父の怨を復さんとおもひし甲斐もあら波に船樓をくつが
 へされ御簾の行衛も知れざれば花の方ハこゝろのうちに深くお道を
 怨み給ひ其日帰館のあると其俣お道を前に喚出し今日の始末を云
 と言葉短かく言聞せ御簾の行衛鑿儀の爲として身の暇を賜はりしかバ
 其所に望を失ひしかども扱詮方のなき俣にその夜初更の比及に合
 が谷の館を出て兼て心を合せたるお理喜於友等の妮姪が住む金澤な
 る瀬戸をさして足を早めて行ほどに名に聞へたる朝比奈の切通しも
 はや過て大道村に「來し頃ハ稍子の剋にぞ近付ける斯る折しも後方
 より窺ひ々々來る者ありて近寄る俣にお道の袂を引止めつ、小聲に
 なり「お道さままでハございませんかト言はれて驚き振りかへり木の

間をもれる薄月に顔すかし見て完尔わらひ 誰かと思へば其方

お友何様して今頃此道を一ハイ御不審ハさる事ながら兼て貴嬢

の仰ゆゑ鎌倉の地を徘徊し賢女に會合ならバ道理を説て味方に招き

合が谷家を打ほろぼし旦那さまのお怨みをかへさでやハ置うかと

呪才心を合せまして今日も那辺這迄まはりしゆゑ暮に及んで腰越

より片瀬川へと」參りし時箇様々の事ありしト那お梅八代が船楼

より小船へ落入り片瀬川まで流れ來しをお安にたすけられしはじめ

より御旗の由来神夢の不思議またお梅八代お安等が身の上の事まで

も立聞せしその跡にて御旗と片袖とすりかへし事一伍一什を物語り

「お聞の通りの子細なれば那お梅等の三婦を味方になさバ貴嬢

の片腕千万人の士卒より頼母しからんと思ひしゆゑ折を見あはせ言

ひ寄らんと呪ハ直さま其場から三婦の跡をつけ私ハまた此御旗を

折を見合せせともはやく貴嬢にお渡しもふそうと只今帰る此道でお

目見いたすも不思」儀な僥倖シテまた貴嬢ハ何故にお供もなしに

夜中此邊をお歩行あそばすト問はれてお道もありし事ども落もな

く言聞すにぞお友ハしきりに歎息しつゝお道の心を察し遣り最便な

くぞ思ひける

貞操婦女八賢誌三輯卷之三了¹⁸

楊太真遺傳 精製桐の箱入
處女香 一廻り 二百二十文

そもく此御葉ハ本朝無類の妙方にて男女に限らず顔の艶をうる

はしくして生れ變りても出来がたき程に色を白くし肌目細になる

功能ありしかなながら此類の薬世間に多くお粉洗粉化粧水其外

油葉などを製して皆ことく顔の薬になるおもむきを功能書に

しるしてあれどもその書付の半分も功能なし依之此御披露を御覽

じても久しいもの、弘口上など看消なし給ふべき事ならんがこ

れハなかく左様に龜末なる葉にてハこれなく只一度用ひ給ふても

忽ちに功能の頭れる妙葉なり一廻り用ひ給ひてハ御顔の「色自然と

桜のごとくなり二廻り用ひ給はゞ如何様に荒症の肌目も羽二重絹の

ごとき手障りとなるのみならず〇にきび〇そばかす〇腫物の跡〇しみ

の類少しも跡なく治りてうるはしくなる事請合也朝起て顔を洗ひ

この玉粧香をすり込たまはゞ些も白粉を付たる様なる気色もなく

只自然素兒の白くうるはしき様になれば娘御方ハいふに不及年重

し御方が用給ひても目に立ずして美しくなる製法ゆゑ御疑ひなく御

用ひ遊され真の美人となり給ふべし 為永春水精劑

髪を艶を出し 妙薬 初みどり

書物并繪入讀本所 江戸數寄屋橋御門外弥左エ門町東側中程 文永堂 大鳴屋傳右衛門

賣弘所^{丁付}



楊大真遺傳 精製箱の箱入
處女香 百二十支

このくち... 楊大真遺傳... 精製箱の箱入... 處女香 百二十支... 楊大真遺傳... 精製箱の箱入... 處女香 百二十支...

賈弘斷

書物共繪讀本所 文永堂 大嶋屋傳右衛門
初みせ... 爲永春水精劑... 書物共繪讀本所 文永堂 大嶋屋傳右衛門

第廿五回

狂女大に騒す洲崎の晴嵐
定正暗に逃る平冨の暮雪

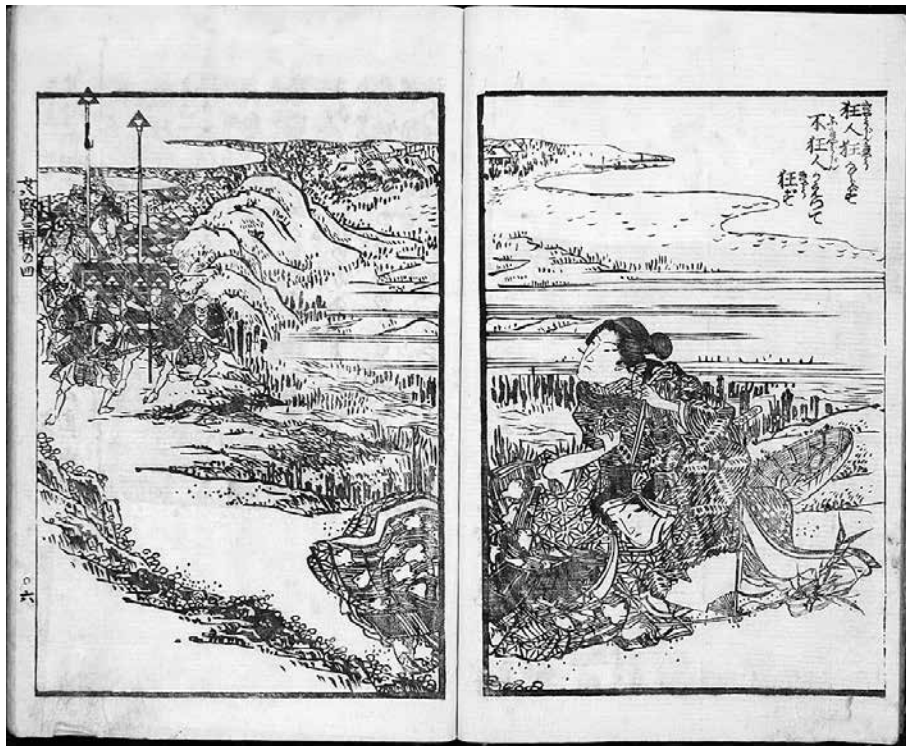
單表音領扇が谷修理大夫定正ハ去る文明三年の秋聊の所勞あるをもて鎌倉を辭し去りつ采地なれば上野の國白井に在城したりしに稍疾病の全快しかバ此ほど鎌倉に在着あり然るに定正祈願ありて歳毎に金沢なる称名寺へ詣るものから疾病に犯されて三歳がほども不參せり心ならず思ふをもて這回在着のあると其俣餘事ハさしおき称名寺へ先參詣のあるべき吉市中ハ素より在郷まで最嚴重に觸られしかバ人々駭き思へども其日の夫役を逃る、道なくその準備をぞ爲たりける恁て文明六年の春弥生も念の七日なるが定正夥の供人を將て金澤山称名寺へ夙より參籠ありて其日申の刻過る頃鎌倉へとて帰還ある路次の歩みもいかめしく洲崎のこなたの松原を通りか、りし折こそあれ誰れかハ知らず向ふより走りて此方へ來る者あり近寄る俣によく見れば歳ハ井才をまだ越へぬ婢からざる獨りの「乙女身にハ妙なる振袖を着て丈の黒髪振り乱し小笹の枝を携へ持しハ心乱れし婦女なるべし定正の行列へ面も振らず駈入るにぞ前走の雑色等駭きながら立寄りておし隔つ、声ふり立音領さまのお通りなるに先禮な婦女奴何所へか行く其所退ず

やとたしなむれども乙女八耳にも入たる体なく挑る士卒を打倒し
又ハ蹴かへし突退て持たる小篋を打振ミ獨り完ルニ笑ひながら
定正の馬前近く寄るを寄せしと争ふほどにはじめハ婦女と侮りしも
今ハなかくあしらひ兼て一個の乙女に雑色等ハさんぐに迫立ら
れもてあまし」たる其折しも這方に茂みし松蔭より立現れし一個の
美嬢宝藍しぼりの單衣を着て覆ひし旅粧装裾短なる出立なるが
鳩へたりし管笠を遙に後方に投捨て今定正の行列を乱妨なせる狂女
の側へつかくと身を寄せて弱腰しつかと抱止るを那方ハ騒がず
身をひねり振りほどき飛びか、つて持たる小篋をひらめかし打て
か、れバ右左と身をかましつ、つと寄りて組よと見へしが瞬間に
狂女を下に組敷て準備の腰帶引解き其俣狂女をいましめつ、處女
ハ聲を振りあげて皆さんかならず騒がれなはや曲者ハ捕へ」しと
言はれて人々欣喜つ又働きに駭きつアツト感じて停ざりけり斯る時
しも定正ハ馬上に在りて那是のありさまを得と見つ鏡際に従ふた
る近臣何某を近づけて如きと令するにぞ心得果て處女の側に歩み
寄りつ、言語を正し如何なる人か知らねども斯乱妨なす白徒を處女
の身にて捕へしハ天晴の働きなりと賞美のあまりに辱くも和女に
對面為給はんと自ら晉領家の宣ふなり敏く此方へ參りてよと言は
れて處女ハ欣喜つ、狂女を其俣引立て那近臣の跡に付き馬前近く
找むになん定正も馬より下りて道傍なる松蔭の芝生に床一几を建さ
せて尻を掛つ、處女に對ひ今其方の働きを馬上ながらに一覽せしに

處女の身にハ有がたき拔群の手並なり基より賤しき者にハあらじ
隠ましからずハ和女の素性あからさまに言聞せよと問はれて處女
ハ臆する色なく仰を返すハ憚りながら吾倅夏ハ當春よりお屋形の
大奥へお側づとめに出ました道と喚る、不束者定めてお聞もござい
ませう錦の御旗の支につき在所をさがしに參れよとの仰をうけし
その夜よりお屋形を立出て鎌倉の地ハいふに及ばず近きわたりの
在々まで隈なく尋ね侍りしかども是ぞと思ふ手が、りなく」夫よ
り武藏下總へとこ、ろざして參る道程が谷駅に遠からぬ坂井木と
かいふ峠にて計らず持病の癩に侵され麓の駅まで歩みがたさにある
辻堂に立寄りて斯須苦痛を堪ぐうちははや日も暮て宵月も曇りがちな
薄闇に誰かハ知らず辻堂へ忍び寄り來る曲者あり様子如何と窺ふ
に腰に付たる盤纏を目がけ盗み取らんとする程に遣らじと争ふ其折
しも彼偷兒の懷より落るハ慥に錦の旗と見るより手早く取上るを
那方も白徒左右なく渡さず迭に引合ふ時しもあれ俄に降り出す村雨
にあやめもわかずなるま、に」終に御旗ハ手に入りしかども路用を
奪ひ去られしのみか偷兒をさへ取逃し心残りにも思へども又證術も
なきま、に一旦お屋形へ立戻り是等のよしを稟あげ其後曲者の鑿穿
をもいたしませうと思ふゆゑ其夜ハ程が谷に止宿をもとめ其所に
一夜を明せしに兎に角癩の全快ねバ心ならずハ侍りしかども同所
に兩日逗留して今日なん巳の時過る頃旅宿を出つ、路次を急ぎ今が
た當所に參りしに巷の噂を兼ねバ君にハ祈願所称名寺に今朝より

【挿絵第七図】

狂人狂ならず不狂人かえつて狂ず



御參籠御在てはやお帰りの様子ゆゑ御行列の美々敷を余所ながらも拜まんと最前よりして那方なる小松の蔭に身をひそめ君の通御を俟ほどにお行列をも弁へず乱妨なせる白徒を見かねて拄ましたのも出過た仕方とお咎めのあらんハ豫て知りながらもあまり不敵の女ゆゑ思し召をも顧みず斯の通りでござるますと実事虚度うちまぜて一伍一什を譚る卑下せし言話を定正ハ實正なりと思ふにぞ些も疑ふ氣色なく其勇力と明弁と且容貌の艶なるを見つ、いよ／＼嘆賞して扇を笏に小膝を找め天晴めでたき處女かな今日の働きのみならで錦の簾さへ取かへせしとハ男子といふとも及びなし只怨むらくハ【挿絵第七図】其時に和女が持病に侵されずハ其儷児をも捕へんに是のみ遺恨に思へども簾に此方へ取置かバ儷児も又自然と知れなん其一條ハ左まれ右まれ嚮より和女が様子を見るに力量といひ才智といひ殊に容顏の嫩弱なる一團漢王に見參なバ忽傾國の名を得るべし我ハ武帝に及ばずとも和女を李家の處女とするとも誰かふさはしからずと言ん若我心のまに／＼ならバ花の方にもしよを明し厚く目を掛使はんに和女が心ハ稱艱の否にあらずハ応をせよいざ敏々と打解たる言話に駭き且耻てお道ハ顔をさと赤らめ冥加にあまるお言話ハ身にあまる程有がたふも又嬉しふもござるますれど如何にせん奥さまより錦の御旗の盜賊を捕へて來よとたまさかに重き仰を蒙りながら假令御旗ハ手に入るとも盜賊を捕へもせで争おめ／＼奥さまに何様御目見がなりませう夫ゆゑ

今ハお返応がと言へバ定正打鎖きなるほど和女が言ふ所ひとつとして無理ならねバ一旦屋形へ誘ひ行き後兎も角もはからはん先携へ來し錦の簾を一覽せんと仰するにぞお道ハハット応つ、いそがはしく腰につけたる小包を打ひらき取出したる錦の簾をうやく敷定正の床のほとりへ持行て跪きつ、「一件の御簾を進らするよと思ひの外隠し持たる懷釧を抜手も見せず定正の脇腹目掛けて突かりしに定正運や宜かりけんお道の掌頸俄に乱れて股のあたりを突かする僅の浅痕と言ひながら思ひ寄らざる夏なれば駭きながら後辺の方へ一間ばかり飛びしざるをこハ口惜と言ふ間もなく躍か、つて一討と焦燥お道が必死の勢ひ咄せとばかり近臣等ハ主人の前に立ふさがり防くをお道ハ夏ともせず愠れる俣に聲はりあげきたなし定正敏く出て怨みの刃を試みよ斯言ふ吾侪ハ武藏の國氷川明神の神祇官渋谷典膳の」處女道今年積つて十八歳吾侪か父なる典膳ハ汝が爲に不意をうたれ非命に死したるのみならず所領をさへ奪はれし其先念さハ片時も忘る、間なき俱不戴天憂年月を送りしにはからず時をうとん花の春俟得たる今日只今汝に復す怨みの一太刀敏々うけよと言ひつ、も飛鳥の如くに走廻る其時這方に躊躇し以前の狂女ハ身を起し空繩なるにや縛縛られたる彼腰帯を引はづし豫て準備の短刀を袖の中より取出してお道をさ、ゆる扇が谷の士卒の中へ砍て入り吾侪を誰とか思ひつる最前狂女と見せたるハ汝」等を謀計たぬ實情ハ渋谷典膳さまの御恩に是まで成長たるお道さまのお

腰元友と言ひしハ吾侪なるぞおのれ定正お主の仇思ひ知れやと言ひかけてお道と侶に尖刀を並べて砍込む勇婦の働き響へバ餓たる虎をもて群羊を駈るごとく只この両女に砍立られ扇が谷の近臣等士卒も侶に辟易して備を立るに遅もなく我擊留んと騒動のみ終に乱れて逃迷ふ其時首領定正ハ薄瘿に屈せぬ大将ゆゑ以前の馬に打跨り逃る自分を罵はけませども崩れ立たる碎なれば争か拮据る夏なるべき雑兵等に」誘はれてみな逸足を踏乱しつ、逃るを両女ハ呼彼々蓬なし返せ定正と言ひつ、短刀打振き一町ばかり追ふほどに何時の間にか八日の暮て頃しも弥生の下旬なれば宵闇なるに空さへもかき曇りたる雨催ひにお道等二女ハ便なく思へど余とて少しも猶豫はず聲をかぎりに喚かけつ、猶洩さじと追ふたりける恁る折しも片刃なる一叢茂りし藪蔭より頭れ出たる一手の軍勢整しく婦女武者なるが這那惣て井名ばかり前面に找みし大将ハ歳も四十才をこよろぎの五十才にハまだ程遠きが丈の黒髪押し切し姿ハ」殊勝に見ゆれとも心ハ猛き女丈夫準備の長刀脇挟み競ふて追ひ來るお道等兩個をさへぎり拮めて一同に鬨を吐とぞ揚たりける

第廿六回

道を柱て愛嬢一賢を擒す
鞘を返て義女孝婦に會す

再説お道等兩個が今定正を迫ひ撃んと競ひか、りし向ふの方へ立あらはれたる一個の勇婦ハ稲村か崎の女隠居真間の愛嬢と喚る、

者にて定正はじめ花の方の心にも愜ふをもて今日なん称名寺の参籠にさへ伴れしと知られるる。當下愛嬉ハ、単聯綾の小袖の上に玄色縮緬の袴着したる其俣に裾小短く取あげて綾の鉢巻結び白柄の長刀脇ばさみてお道をきつと白眼つ、渋谷の乙女道とやら勿体なくも管領さまを親の敵の仇人のと身の程知らぬもほどがある余ハいへ和女が今の働き乙女に似氣なき大膽武勇若も今より心をあらため管領さまへ降参なさバ命を助るのみならず功によりてハ身の立やう愛嬉が独成爲やうほどに思ひ直して降参しや夫ともにまだ迷ひ覚ずハ此長刀の切味を見せてさませんと言はれてお道ハ温りに得堪ず疾視「つめたる必死の覚悟に太刀取り直して些とも撓まずさてハ其方が聞及びし真間の愛嬉でありけるよな耳穢らはしき降参呼はり差出て怪我を爲様より道をひらいて敏通しや夫ともたつて拄ゆるなら先其方から一討にと言ひつ、找む不敵の廣言憎さも憎しと愛嬉に従ふ惴りに惴りし婦女武者各手得物を引提「ヤツト被たる諸聲と俱に整く衝ひらめかす鎗長刀を後前に飛越反越ひるまづ撓まずお友と侶に聲掛合ふて右にうけまた左りに流す至妙の働き當るに前なく目瞬間に六七個矢庭に命を隕しつ、遺るも」¹⁰ 痛瘻を負はぬハなく忽地滾と乱れ立を両女ハ得たりとます「找み愛嬉を目掛けて撃て掛る折もこそあれ定正の近臣雑色打連て時分を計りかへし來つ準備の松明打振振捕稠て洩さじと力を合せて戦ふほどにお道お友の両勇婦もいよ「心を励まして必死の働き撓むにあら

ねど嚮に洲崎の松原より今にいたりて一牌あまり棄戦突戦間なきのみか後詰自方のあるにもあらで僅に主従両女なれば流石女子の氣勞れて乱る、足を踏しめ「戦ひ危ふく視へにける浩る所に片辺なる芒小笹の茂みより吐と」揚たる鬨の聲と侶に射出す多数の征箭に扇が谷の雑色等ハ射られて矢庭に五六人おなじ枕に仆る、にぞ伏勢ありと思ひにけれバ駭き騒ぐをお道等ハ計らぬ援兵に力を得て矢刀するどく戦ふたり案下那方の笹原より顕れ出たる四個の美婦持たる弓箭をからりと投捨準備の短刀打振ながら扇が谷の多勢の中へ面もふらず砍入るハ是則別人ならずお梅青柳八代お安の四賢女にてぞ有にける恠てお梅等の四賢女ハ四方八面に砍まはりてお道に力を合するにぞ愛嬉ハ是等の様子を視て自分をひそかに¹¹ 招きて絳如此「秘計をしめし五名ばかりを忍はせて其身ハ猶も諸軍に先立士卒等を罵勵ましつ、那討捕れよ逃すなど厳しく下知をなす程に多勢を憑む小卒等入乱れまた立代りて頻りに挑み戦ふものから宵間なるに炬さへ打落されし夏なれば敵味方の弁へなく心ならずも同士撃して空に命を隕すもあり余バお梅等四賢女も於道お友の両勇婦も東方西方と走廻りて別々になりしかども些ともひるむ氣色なく千変万化の秘術を尽し嘯噴で撃合突合頻りに捷に乗るほどに扇が谷の軍兵等ハこの「勢ひに碎易して早にこらへず皆諸侶に人碎撲てぞ崩れしかバ六個の勇婦はいよ「找みてお梅八代お友の三個ハ扇が谷の近臣等を追ひ撃んと走行バ青柳お道の二

賢女ハ愛嬌を追ひつゝ、二町三町或ひハ四五町五六町よき程に追ひ捨
て定正をもらせしうゑハ余のみ戦ひを好むにあらねバ早くも迹を
購ましつ己が隨意退きける其中にお安一個ハ始めよりして衆に先立
敵の迹を追ふほどにあやめもわかぬ闇なれば十町あまりも来しと
思ふに敵ハ早くも落失たりけん四辺に近き人音なければ了に望みを
うしなふて残り惜し氣に行み居しが斯て「止べきにあらざれば元
来し道へと踵を回らし豫て約せし瀬戸村をこゝろざしつゝ、行折し
も思ひがけなき藪蔭よりヤット掛たる聲と侶に投出したる鍵繩に引
かへされて仆るれば忽地出る多數の夥兵おりかさなりつゝ、お安をお
さへ終いに繩をぞ掛たりける可憐お安が薄命此末憂目にあふや否
や今這回にしも説尽さず开ハ後の回りに委しからん閑話休題
つお道ハ計らず援兵を得て難なく敵を追ひしりぞけつ一旦爰を立退
つ折を見合せ定正を撃て本意を遂なんと思ふものからお友にさへ
別れて行衛の知れざればはや此所を落失しが若撃れしかと右つ左つ
思」按に首を傾けても如方暗夜の支なれば尋ねんとする便もなく其
うゑ放心、此辺に居て扇が谷の大軍の再度おし寄せ来りなバ戦ひ
つられし身ひとつもて這回ハ防ぎとめ難し今定正を撃得ぬのみか此身
をさへに失はゞ智なき者とや笑れん時を俟こそよからめと肚に問ひ
肚に應へて案内知つたる道なれば闇にも迷はず徐々と瀬戸河原なる
隠家を目當に道を急ぎつゝ、はや程近き明神の杜の這方に來し折しも
迹より窺ふ曲者あり。とも知らずして行過るを那曲者ハすかし見て

お道のさしたる短刀の鑢をしつかと握りとめ」¹³ 氷川の神職 渋谷
が處女何れへ逃るかマア待ちやと言はれてお道ハ些とも騒がず静に
後方を見かへりて誰かハ知らぬが入らざる腕立出過後悔せぬ様に
其所放しやいのと言ひつゝ、も身をひねつて振ほどくを曲者ハ猶放
さじと鑢を握りし其假にて些とも動かぬ大力にお道ハ駭き且怒りて
エイヤと引バエイヤと引くはづみにお道の短刀ハ差たるまゝにすらり
と抜けてお道ハ前へ曲者ハ鞘を片手に握りしまゝ、後の方へたぢく
と二足三足よろめくを得たりとお道ハ此間に片辺の小草に身を隠し
其假行衛ハ知れずなりぬ其時件の曲者ハ「挿絵第八回」¹⁴ 最本意
なげにイみて跡見送りつゝ、數多嘆息してぞ居たりしが心にそれと
點頭で瀬戸の方へと走りゆく前話不題武藏の國久良岐郡金澤なる
瀬戸村の片辺りに藁の棟最低く古びし杉の生垣にからげ付たる
枝折戸ハ浮世に不樂隠家と言はでも知れし住居なり折しもあれ那
お道ハ曲者と挑みしとき習ひ覚えし術をもて其場を通れ去りつゝ、も
稍此庵に來しほとに四辺見まはし枝折戸を卒度おし明つ、内に入
りて勝手おほへし支なれば暗きにまよはずか、ぐりぐり火桶の側
へ這ひ寄りて火箸の先もて埋火を「掘り出しつゝ、附木にうつして
先燈火を照し置き懐よりして父典膳の位牌を取り出し佛壇へうや
くしく備へつゝ、遙か下つて手をつかへん父上さま無御先念でござんせう其御先念がはらしたさに千辛万苦に月日を経て今日といふ
今日定正を計りおふせて一撃にと思ひし支も奈未與美の腕の乱れに

【挿絵第八図】

青柳再びお道を試す



水戸黄門の四

〇十五

思はずも聊痲痺を負せしのみにて不覚をとりし口惜さ夫のみな
 らず片腕とも憑みしお友ハ行衛知れず今まで此家へ帰らぬハ若乱軍
 の中にしも可憐命を隕せしか心が、りハ夫のみならで最前數多の
 兵士等に捕圍まれてお友と二個既に「戦ひ勞れしかバ危ふかりし
 を倅いに援けられたる四個の女中何所の人ぞと問ひもせず禮さへ
 言はれぬ必死の場所ゆゑ早にその別別れしが奈何なりけん氣掛り
 など言ひつゝ、外面を見やりつゝ、ほろりとこぼす一雫の涙に實情あ
 らはるゝ、孝女の心を哀れとも知る人ぞなき一家に絆訪ふハ只松風
 のみ最物凄く更渡る其時お道ハ父の位牌と腰に結びし錦の籠を俱に
 佛壇の中に納めて嚮より片辺に置たりし鞘なき短刀を手に取り上げ
 つくぐ見つゝ、訝し氣に・合点のゆかぬハ先刻の曲者暗き夜なれば
 夫ぞともたしかに姿ハ見とめねど婦女に似氣なき」¹⁶不敵者ゆゑ那を
 相手に間取りて大軍再度寄せ來らハその時こそハ防ぎがたし大夏
 前の小夏ぞと思ふて其場ハ遁れしかども父上さまの遺物ぞと片時放
 さぬ短刀のと言ふ時那方の垣間より、其鞘是にござんすと言ひつゝ、
 立ち出る一個のお女おめたる色なく枝折戸を明て母屋の椽側へ找み登
 るをお道ハ見つゝ、打駭きしが又更に處女の顔を熟視て・其方ハ
 最前明神の杜で出合ひし曲者ならずや嚮の手並に懲もせて愛まで
 來しハ夏虫の火に寄るより果敢なきを知らで命を捨に來しか卒手の
 内を知らせんと言ひつゝ、苛急で撃んと「找むを柱とゞめたる腕と侶
 に這方ハ速くも聲をかけ・マア待しやんせお道さん吾侪が此所へ參つ

たも種々深い子細ある事先其刃をおさめてよと言はれてお道ハ訝
かしながら先短刀を片辺に置き處女の顔を右視左視て・合点の行ぬ
今の言語吾侪の名まで知つたる和女ハ・サア其不審ハ道理ながら吾侪
ハお前と宿因ある菊坂小六の娘青柳定めて覚へがござんせう空る
七月の念の五日その日も丁度霄闇の星さへ暗き雨空に圖塚山の藪蔭
にてお袖さんの必死の難をと言へバお道も打領き・計らず助けて
呪奴の名乗をしたる吾侪の嬉しき・迭に「積るおの話に親身の
実情ハ見へながら邂逅會ふた財公の願ひも愜へず錦の旗を手蔓に敵
へ近寄つて親公の仇を報はんとハ寔に得がたい孝女の操・其折後方
に聞人のありとも知らねバ身のうゑの一伍一什を物がたる時しも
片辺に仆れたる痕負の悪女が窺ひ寄り吾侪の所持なす御旗をバ取る
を遣らじと争ふうち御旗ハさつと引解け・現はれ出たる雲に龍夜目
にも夫と視しゆゑに取りかへさんと思へどもあやなき闇に途をう
しなひ・争ふはづみに突あたり可憐や財ハ深谷の底へ落て行衛ハ
しらぐとはや明近き月代に・顔見合せて這方」より名乗掛んと思
ふうち不思議の術にお前の姿本意なく其場で見失ひ残り惜しさを
今爰で再會しもつきせぬ奇縁・そんなら最前明神の杜で出會し曲者
も・やつはり吾侪が戯れにお前の心をひき見るため・そふとハ知らず
今までも心にかゝりし短刀の・鞘ハ爰にと青柳が懐よりして取り出
すを八道ハ受取完全と迭ひに笑ふ美人と美人猶這回ハ長けれども
此巻にしも説尽されねハ斯須爰に筆をとゞむ开ハ又後回に分解を

听ねかし

貞操婦女八賢誌三輯卷之四了¹⁸

貞操婦女八賢誌三輯卷之五

東都 狂訓亭主人編次

第廿七回

佛縁を現して青柳一賢を説く
夥兵を刺して阿力義忠を誼ぶ

當下這所へ來かゝるハイとも怪しき一個の修行者、草木綿の單衣の
裾小短く取りあげておなじ色なる脚半甲掛蘭織笠もて面を隠し鮮
やかなる笈を背負て折戸のほとりに身を寄せつゝ、裡面の様子を窺
ふに今青柳とお道との問答ほのかに聞へしかバ駭きながらも左右
なく入らず竊足しつゝ、近寄りて椽側の這方なる生垣の間に身をひ
そめ猶も様子を聞て居り裡面にハ二個が夫ぞとも神ならぬ身の知る
よしなればバお道ハ短刀の鞘を受取り先其刃をおさめつゝ、心あり
げなお前の言語然どもお前と吾侪とハ聊由縁のありとも知らで
況て過世の縁ありとハ心得がたきお前のおの話是にハ何ぞ子細あ
らん奈何と疑問バ青柳完全と打笑て其疑ひハ余る更ながらお
前も覚へてござんせう思ひ出せハ去年の秋所も戸田の川船でお前
ハ神子さん吾侪ハ順禮鈍くも老女に欺かれ不覚の縛縛に引るゝ道
お前ハ不思議の妙術にて逃れし跡ハ吾侪」ひとり奈何なる憂目に

逢ふ支かと思ひの外に計らずも引る、先ハ神宮なる那敷中山満化寺にてお斉の尼に見參なし始めて聞し過世の因縁其子細ハ他ならず去る長録初の年豊嶋の家に内乱起り奸臣了に時を得て國家をさへに横領なし剩へお家の正統なる光姫さま始路姫に作りしハ誤りと鳩若さまを殺害なさんと計りしを光姫さまの乳母なる浅江と喚れし忠義の女中速くも其機を推せしかバ密に両君光姫ともな伴ひて武藏下総の間に忍ばせ其身ハ自ら尼となりお斉の此丘と法名なし躍念佛に支寄せて再び豊嶋家興立の自方を集る今最中お斉の尼となられし事只此一條のみならず其昔豊嶋家にて一木を以て八體を作りなしたる弥陀佛あり信仰殊に厚かりしに豊嶋家内乱の時に臨みて忽然として失たりき不思議といふハ是のみならでお斉の尼の仮寐の夢に彼八體の阿弥陀佛現然と立給ひ汝豊嶋家再興の赤心尤も賞すべし吾八體も豊嶋家に深き因のあるをもて當家の衰亡を見るに忍びず須臾佛身をひるがへし人間界に生をなし八個の乙女と化現して當家再興の力を尽さんゆめく疑ふ支なかれと宣ふ程に」夢覺たり夫よりしてお斉の尼ハいよ、ますく佛恩の辱を思ふをもて道德堅固の尼僧となり争で件の八賢女を尋ね出して自方となし豊嶋の家を再興せんと豫て自得の神占にて種々在所を下ひしにいまだ時運の到らねバ八個爰に俱足せねども一木をもつて造りたる弥陀の化身であるものを選びに親ハ異るとも過世を言はゞきやうだいどうだんが妮姪同然躡て八賢俱足して心を一つに當家を佐ん和女も豊嶋に由緒ある丸塚殿の浪人の處女

のみかハ八個の一個と喚る、上からハ今より八個の在家をもとめ一日もはやく豊嶋家を再び」興す計呉々憑むハ此支なり又彼捕へし田舎神女もおなじ賢女の一個なれども那ハ心に願ひあれバ奇術を以て遁れしならん余れども因あり縁あれバ再會ハ猶遠からじと最委細なる尼君の仰に駭く此身の素性今佛縁を身にうけて其名の爰に知れたる者お前と吾儕のみならずまだ此他に三個あり其一個ハお前の妹お袖さんの結髪梅太郎とハ飯の名にて實情ハ豊嶋の忠臣なりし神宮秀齊の處女お梅次ハ八代次ハお安と一個の身のうゑと其身の支さへ取ませて一伍一什を如此と支落もなく物語れば」お道ハ情開了て思はず小膝をはたと打ち偕ハ日外戸田川の小船で逢ひしもお前にて那とき悪婦とおもひたる彼船長も尼君のやつぱり私等二個をバ誘はんとの支なりしかとも知らざれば願ひある此身を賊手に囚はれてハ思ひ立たる仇討の其宿願も慥はねバ奇術をもつて身を遁れしが今のお前のお話ではじめて知つた吾儕の身のうへ恁まで勝れし人々に過世の縁のあらんとハ計らざりける今霄の嬉しさ夫にて思ひ合すれば心當りがござんすと那のお友より聞たりし片瀬川にての緯の來由其時御旗を」奪ひし事夫よりしてお理喜ハお梅等三個を賢婦ぞと思ふをもて會て自方に憑まん跡を慕ふて行しのみ今日まで音信のなかりし事またお道ハ錦の旗の再び手に入る支を得てお友と計りて定正を覘ひ撃んとせしほどに思はずも腕の乱れにはからぬ不覺を取りたりしに又計らざる援を得て今爰

【挿絵第九回】

浅江幼主をたすけて豊島城を落つ



に及びし度まで絆如此きと報知にぞ青柳八間毎にあるひハ駭き又ハ感じて頻に膝をす、めける其時お道ハ佛檀より以前の御簾を取出して貌ちをあらため言葉を正し寔に得がたい今宵のお話假令過⁴世の因縁なくとも恁まで義ある賢女等を知らで御簾をしばく奪ひ物思はせしのみならずお前とさへも両三度讐敵の思ひをせしハ吾身ながらも鈍ましやと最面なげに暗話にぞ青柳聞つ、打けしてアレお道さん其様な心づかひハ入らぬ互互に因みを結ぶからハ親こそ異れ替らぬハ妮姉遠慮のないが隔ぬ心此末ともに吉につけ凶きにつけて何度も心を合せ相談して豊嶋の家の再興をと言へバお道も打点頭なるほど嬉しひお前のお言話夫につけてもお梅さん等ハ何故此家へハござんせぬやら心が、りハ是のみならでお友ハいかにせし度⁵【挿絵第九回】ぞとお道が言へバ青柳も俱に案じる胸と胸互互に顔を見合せて思ひかねてぞ居たりしがお道ハきつと心付きお前ハ何と思ふか知らねど此地ハ鎌倉へ遠からねども人煙少に山多ければ若や闇路に踏まよひあられぬ方へ往もされしか夫にても心得ぬハ勝手覚へしお友さへいまだ此家へ帰らぬハ是も又訝し、且定正の追手の軍兵再び推寄せ来る度ありて不思議の災ひなしとも言はず開も其俣に打捨て爰にて物を思はんより這等あたりを那此と隈なく尋ねて伴ひ來らん誘もるともにと言ひつ、も短刀を腰に跨へ錦の旗を」携へていそがはしく身を超せバ青柳もまた其意にしたがひ立あがらんとする折しも何時の間にか

ハ忍び入りけん黒装束せし四個の夥兵椽の下より這ひ出てお道青柳の二個を目掛持たる十手を打振り、ヤツト掛たる聲と侶に双方整しく組付を二婦ハ騒がずふりはなし準備の短刀拔手も見せず右と左に二個の夥兵を水もたまたまず撃下るを猶懲すまに近寄る二個、面倒など青柳お道襟がみ取つて三間ばかり外面の方へ投付たり余ども屈せぬ二個の夥兵勇婦に投付られながらも猶起上りて組つかんと「蠢きまはる其所へ表の方より背戸口より走り出たる二個の婦女件夥兵が起んとするを起しもやらず押伏て懐劍拔持差通すをお道ハ駭き是を見るに一婦ハお友今一婦ハ修行者姿に立立ども是なんお友が姉なりしお理喜にてぞありにける斯る折しも納戸の方よりアツト誉たる聲と侶に仕切の襖押明て徐々入來る八代お梅完尔笑ふて坐につくを視るよりお道も青柳もあまりの支に駭き呆れ是ハくつとばかりにて須臾言語もあらざりける案下お梅と八代ハお道に對ひて貌を正し互ひに口誼の果し後お梅ハしづかに小膝を找め嚮にハ」火急の場所なるに暗さハ暗し敵ハ大勢丁に六個が六所ハ散々になりゆきしに八代さんと吾儕とハ始めよりして扇が谷の士卒に對ひて戦ひしが二町ばかり追ふほどに速くも敵ハ逸失しかバ恠て猶豫する場所ならずと八代さんと諸侶に瀬戸村さして來る道にて是なるお友に喚ひ留られ駭きながら様子を聞くに日外多塚の一家にて老女のおしへし瀬戸村の其妮姪の一個なるよし嬉しさハ只是のみならで日頃尋ぬるお道さんさへやつぱり瀬戸の一家に忍びて在すること

のよし聞とひとしく八代」さんも吾儕も侶に小躍して夫よりお友をしるべに立嚮に此家へ來つゝ見るに青柳さんハ急速くも這所に在するのみならずお道さんとの問答最中様子奈何と思ふゆゑひそかに背戸の方より廻り納戸の中に忍び居て残らず洩れ聞く始終のお話それに付ても氣が、りハお安さんの身の行衛今まで爰へござんせぬハ若も撃れハ爲給はぬか夫かあらぬか奈何やと言へバお道も青柳も八代もまたお友等も互ひに眼と眼を見合すのみ思ひかねてぞ居たりける其中に彼お理喜ハ夥兵の死骸を片辺にかひやりお梅青柳八代に先初對」面の禮を誼次にお道に打對ひ吾儕夏ハ過し日に片瀬川にてお友に別れお梅さま等のお跡を追ひ折もあらバお道さまの思し召しをバ言解て自方にお勧めもふそうと尋塚村まで參りしに青柳さまの危急の御様子夫ゆゑにこそお二個ハ袖乞とまで身をやつし神宮屋夫婦と大六どのを欺きおふせて青柳さまをお救ひなせる思し召と推せしゆゑに其夜ひそかに大六どの、邸に間近き小笹の中に身をひそめ様子奈何と窺ひしに按に遠はずお二個が青柳様を伴ふて邸をお逃れなさるゝまで始終の様子を見定めしが「若大六が心付追手をかけんも計られねハ須臾其場に忍び居て猶も様子を窺ひしに大六ハ唯一筋に神宮屋夫婦が所爲と思へバ直さま人数を催ふして自ら神宮屋へ走向ひ家内残らず砍尽してお三個を捕かへさんと最悪かにも打立にぞ其時までも吾儕ハ小笹の中に忍び居しかこゝろの裏に思ふやう今大六が神宮屋へ彗勢をもつて押寄せて家内残ら

ず欲尽すともお三個の在所知れねバ再び諸方へ手分して捕へんとこそ計るならめ余するときにハ皆さまの御身に禍ひなしとも言はれず奈何も計りて大六に追手を」出させぬ一趣向はて何がなと種々に獨り思按をめぐらせしにひとつの苦計を新作意那大六が神宮屋へ自ら発向し其跡にてひそかに邸へ忍び入り家の後園に積貯へたる山にひとしき秣の中へ時分を計りて火を放せしに折から夜風のはげしくて猛火盛んに燃あがるにぞ按に遠はす大六ハ放火に膽をや冷しけんお三個のお行衛さへ撃穿するに間なく只いたつらに神宮屋の家内を残らず欲尽せしのみ人数を邸へ引揚しかバ其間に吾儕ハ豫て便りハ聞ながら絶て久しく逢はざりし母の住居へ尋ねゆき様子を聞け「ば」皆さまにハ今がた此家をお立ありて吾儕どもの隠家へお越しありしと聞しより夫にて些ハ心安堵其夜ハ母と語り明して翌日巳の牌過る頃知縣には、かりなきにもあらねバ修行者姿に身をやつし那地を發足なしつ、も嚮に當地へ参り着しに巷の人の噂を聞くに洲崎のあなたの松原にて管領さまの行列を乱妨なせる婦女ありて今戦ひの最中と聞に胸まづ轟て急ぎ洲崎へ到らんとする道の程にて日ハ暮つ宵闇なれども覚へし道ゆゑ足に任せて行着しにはや戦ひハ果し後にて四辺に人氣もあら¹⁰「あらざれば本意なく那処を立ち去りて此家へ來つ、計らずもお道さまと青柳さまの迭に積るおの話を洩聞のみか今爰でお梅さま方お両女にもお目にかゝりし吾儕の欣喜はに増ものなしと赤心あらはす言の葉にみなく感嘆為たり

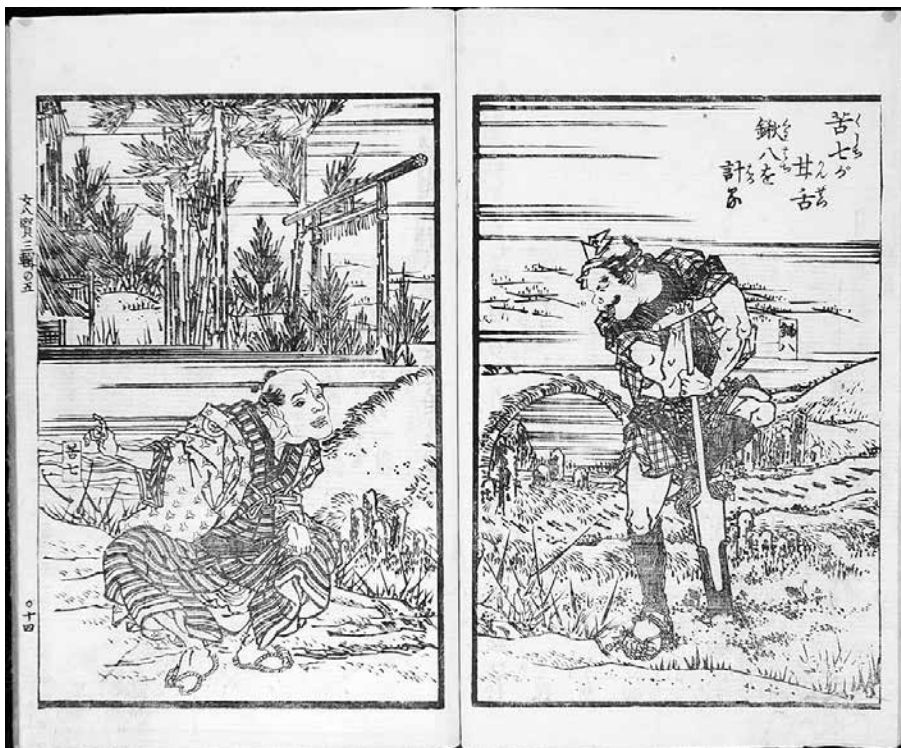
ける

第廿八回 瀬戸の暁天に於道秘書を焼く 客路の暮堤に悪僕愚直を欺く

案下お梅ハ默然としてお理喜が的話を聞居たりしに稍あつて首をもたげ寔に惡の其身に報ふ今にはじめぬ」夏ながら那神宮屋の渾家といふハ現在吾儕の伯母なれども素より心頑にて夫の惡を諫ハせず却て惡事を伎倆しゆゑ早に其身を大六が非道の刃に失ひし事自業自得といひながら假令吾儕に難面とも血筋ハ絶ぬ伯母なるをおもへバいと愁傷とほろりと氣を配り皆さん何とか思はんす今までの中にも八代ハ四辺にきつと氣を配り皆さん何とか思はんす今までの千草に啼連し耳姦しき蛙の聲一時に止しも心得ず若や此家へ敵兵のひそかに押寄來しものか余も有バあれ今爰で六女が必死をきはめなバ怕るゝにしも足らねども¹¹唯氣が、りハお安さん今まで此所へもござんせぬハ奈何なりゆき給ひしか何ハ兎もあれ此家を立去り行衛を尋ね諸侶に何れの國へか逃れ去らずハ不思議の禍ひなしとも言れじ皆さん奈何に思はんすと言はれてお梅も青柳も尤もと氣の付く其中にお道ハ屢々打點頭吾儕の危急を救はんと影の敵に飲入りて其後行衛の知れずといふお安さんをバ其俣に片時打捨置がたし去來さらバ諸侶にと言つ、立しが又更に片辺に置し錦の旗をうやくく敷手に取りあげお梅に渡して倍いふやう昨日までも今日までも

【挿絵第十圖】

苦七が甘舌鍛八を計る



只一筋に「爺さんの響とし思ふ定正を撃果さんと思ふにより他の寶と知りながら屢々御旗を奪ひし事今さら悔ひても其詮なし夫を憎しとて捨られず恚も賢れし人々に因みを結びしうゑからハ響を撃日のなくてや果ん余すれば此身に自得せし奇術も今ハありて益なし素よりかゝる幻術ハ人の耳目を迷すのみにて仁義を守る真勇婦の深くも耻る所爲なれば今あらためて術をかへし再び用ゆる支あらしと言ひつ、豫て懷中に秘書たりし奇術の書を出せばお理喜もまたお友もおなじく取り出す忍術の秘書を」¹²お道ハ受取りて皆諸侶に片辺なる圍爐裏の中へ投込むにぞ時しも吹來る夜嵐にさつと燃立一焔の猛火と侶に件の秘書ハ煙りとなりてぞ失にける斯る折しも外の方より俄に起る陣鐘と侶に聞ゆる関の聲に這方ハ覺期の四賢女二勇婦敵に合ふて八面倒と身縊ひしつ背戸口よりひそかに忍びて立出しハ最も危ふき度になん話説分兩頭偈も多塚の里長なりし李兵衛が處女お竹ハ思ひ寄らずも大六に家財残らず闕所せられ其身も早に捕はれしを又計らずも青柳の輔に其場を逃れつ、那鍛八に「挿絵第十圖」¹³伴なはれ指て行べき當ハなけれど須臾も猶豫するところにあらねバ兄梅太郎が鎌倉へ行と聞しを心當に相模路さして趣しに倅なき時とて途中にてお竹ハ俄に病ひに侵され一歩とても歩行得ねバ鍛八ハますく駭き恚てハなかく此俥にて鎌倉までハ行がたしとハ言へ這辺に放心さして若も追隊に出合なバ其時逃る、道ハなしと千々に心ハくだけでも力づくでも及ばぬのハ世にいふ主

と病にて是非なく其地の旅店を憑き奥の一院を借受つ、お竹を其所に忍はせて種々医療を尽せども左に右急快の驗なく¹⁴ 空しく陰陽を經るほどに速くも秋過冬去りて其年も了に暮つ明れば文明六年の春もなかばに及びしかどもお竹八枕に臥たるのみ重るといふにハあらねども頼に全快様子なければ鉄八ハたゞ手ひとつにて看病愈る夏ハなけれど這地に足を止めてよりはや八月にもなりしかば盤纏も今ハ残り少く余ども追隊の沙汰なければバ夫のみすこしハ心易く其次の日より鉄八ハ近き四辺の百姓に昼ハ終日雇われて僅の錢を貰ひつ、薬と旅籠の料に足し夜ハ終夜看病して須臾も撓ぬ赤心ハ最有がたき老僧なり不題爰にまたおなじ多塚の「里なりし那神宮屋の奴僕苦七ハ嚮に平左衛門が言話に随か戸田河原より袖乞をひそかに誘ひ來りしかバ定めて夥の褒美あらんと思ひの外に其沙汰もなかく只口禁をされたるのみ鑑書文にもありつかねバ苦七ハ心中心よからず余ども爲べき様もなく徒支となりゆきしに其夜俄に郡館より大六自走向ひて夫婦をはじめ家内の者を残りなく砍尽せしと苦七ハ奸智に闌たる者ゆゑひそかに床下へ忍び入りからく命を助かりても身に半錢の貯へもなく此俣にてハ何國へも走りがたしと思へども當所に長居もおそれあれバ夫より直さま相模路へ¹⁵ 心ざしつ、往道にて圖視れバ片辺の田の畔にて余跡目もふらず耕作者あり近寄るま、によく／＼視れば豈計らんや豫て知る莊官兵衛が家の老僕鉄八にてぞありければ偕ハ這奴お竹を伴ひ此辺あたりに忍び居

てかゝる所爲をもなすならん然すれば青柳梅太郎また彼両婦の袖乞も此辺に忍びて居るものか基大六が神宮屋を乱妨なせし起りといふハ那青柳等が逃たる故にて他に子細のありとも知らねバ今鉄八をひそかに欺き那等が在家を聞出し搦め補て伴ひ行バそれを功に神宮屋の跡式ハみな吾物ならんと忽地奸計を新主意驅て¹⁶ 件の鉄八が辺りへ近く找み寄り夫にござるハ多塚なる鉄八どのにハあらずやと言かけられて鉄八ハ打駭きつ、見かへりて余宣ふハ神宮屋なる苦七叟で在するかと言へバ這方も打点頭いかにも吾們ハ苦七なりおん身と吾とハ其以前より久しき馴染でありつるに去る七月の騒動に速くもおん身ハ嬢さまお竹をを救ひ出して逃られたる後何國に忍び在するとも風の便りも聞ざりしに偕ハ這辺に世を忍びてと言れてはつと鉄八が鞆胸ハ有や无やの関に人目を忍ぶ身ハ包とすれど頭はる、目色をさとする奸智の苦七打合笑つ、小膝を¹⁶ 找め鉄八どのよ余ばかりに駭き給ふも人にぞ寄る假令吾們が聞たりとも知らぬ振して通すのが其所が豫ての念頃だけ包も程のあるものなり然ハ言へ日頃腹悪き神宮屋夫婦に使はる、吾們なるゆゑ其様に疑はる、も道理ながらおん身も這辺に在すれば在所の様子も聞れしならんが昨夜俄かに神宮屋へ子細ハ何か知らねどもお知縣の大六さま多くの夥兵を引俱して案内もなく撃て入り旦那夫婦ハいふに及ず家内の者ども残りなく砍尽されし其中に吾們ひとりハ運よくも不思議に命を助かりて爰まで逃てハ來しなれども」盤纏の貯へととてもなく況て行べき

先もなければ此所よりおん身の住給ふ方へ吾們を伴なふて此場の
 難義を救ひ給はゞ報知まいらする一言あり其子細ハ他ならねども
 豫ておん身も知らるゝ通りお知縣の非道なる情といふてハ露程も
 なく余のみ咎なき神宮屋さへ聞るゝ通りお知縣の非道なる情といふてハ露程も
 ま御兄才且青柳とか喚るゝ乙女の鑿義ハ今もいよ／＼厳しくおん
 身這辺に忍び居て今日まで追隊に出合はざるハ倅ひにして遁れしな
 り然るに吾們ハ主に放れ他に寄辺もなき身なるにおん身と旧きよし
 みもあれバ今より」¹⁷ おん身と心を合せお竹さまをバ何れにまれ遠き
 方へ伴ひゆき其所に斯須忍ばせて折を見合せお地頭へお知縣の非道
 を訴へ理非明白にあらはれなバ神宮と莊官の両家をバ以前のごとく
 取立て約束なれば神宮屋へ梅太郎さまを養子となしお袖さまと娶合
 なバ那嬢の願ひの叶ふのみか亡お旦那^{平方衛門}も本意ならんとお
 竹さまハ何れにても能き聲さまを撰みむかへて空兵衛さまの跡を
 立なバ双方全き度を得て簡程芽出度度ハあらじと口から出るま、
 弁に任せて實しやかに説惑はすにぞ正直一圖の鉄八くわはちなれば始
 の程ハ疑ひしが早に伎倆の畏に落てお竹が病氣の夏なつの来由今猶旅店
 にある夏まで一伍一什を譚るにぞ苦七ハ心中密かによるこびは
 や謀計成就しぬと思ふものから色にも出さで躰たがに誘はれ
 彼旅店にぞ到りける必竟苦七が計得て又甚麼なる夏をかなす开ハ
 次の巻に分解を听ねかし

貞操婦女八賢誌三輯卷之五終」¹⁸

【後ろ表紙】

